明治廿七年十二月廿七日發行

女鑑

第七十七號

東京國光社

女鑑第七十七號目次

堀部金丸の母



歳杪の感懷

あら玉の年たち歸りぬ、明治二十七の年來りぬと、喜び迎へて、諸孃とともに、かくせまし、ゐかこそせめと、勵みつとめたりし種々の事どもの、或は成り、或は成りも果てざるに、隙行く駒の足掻は、いと逸く、來經往く月日は、矢の如くにて、今年は、こゝに暮れはてなんとす。あはれ、諸孃、この一歳がほどの有りし事ども、今ふりかへりみて、如何なる感懷をか起したまふ。

そも〳〵、我が皇大御國は、千萬年の昔より、世界の國の首となるべき大御國なり。かれ、四方の國々は、青海原に、棹柁はさず、船滿ちつゞけて、朝貢奉

り、代々の　皇上の御稜威に靡きまつらぬはなかりき。然るに、かの言さへぐ支那國は、無禮を我が大御國に加へければ、我が　大君は、いたく怒らせられ、大御軍をさしむけ給ひ、國民は、皆　大君の大御心を心とし、いたく彼が暴虐を疾み憤りて、　大君の任命のまに〳〵、海陸の軍人は、均しく進みに進みて、彼の要港要地を占領して、大に我が　大君の御稜威を耀かし、我が國光を揚げたりしは、幾千年來、ためしなき事なりき。なれど、我が大君は、九重の雲深き大宮を出でさせられ、廣島の行宮に御駕を駐めさせ給ひてより、はや、四月にもなりぬ。我が　后宮には、　大君の御事を思し召させられ、いたく、御心を勞ませ給ひ、御調度まで儉素に從はせ給ふとぞ。我が國民の父母と戴き奉る、　大君　后宮の大御身、みづから、軍國の爲に勞ませ給ふ御

時に逢ひ奉りて、吾人國民は、如何にしてか、大御心を安め奉り、大御惠の萬一にも報奉つらで、過ぐすべきことかはと、吾も人も、皆一つ心になりて、各自、其の業務を勤め勵みて、國內、擧りて、

一旦緩急あれば、義勇公に奉し以て天壤無窮の皇運を扶翼すべし

との、大御言の御意を奉體し奉らざるものあらむやは。

吾人が、常に、諸孃と、共に勵み勉めて、學の道に力を盡くしゝは、常には、其の身を修め行を愼み、日用度を約にして、斯かゝ大御國の大事の出來つらん時こそ、其の身の有らん限の力を盡くし、眞心を竭くして、偏に、大御代の御榮を扶け奉らんとてなり。男も女も、皆、大御國の蒼生にして、大君の御子たらぬものはなかりければ、必、斯く務めずてはあるまじき事は、言も更なり。吾人

の、諸嬢に告げまゐらすること、諸嬢の心を用ゐ給ふ所、全く此にあることにて、朝な夕なに、怠りもなくて、この年の暮とはなりにき。斯く年比、眞心を大御國に盡くす中にも、分きて、是歳こそ、實に、其の本分を盡くすべき年なりしを、先、其の萬分をも盡くしたるは、心よき事なりけり。

されど、今よりこん年の幾千歳幾萬世までの、ことを思へば、前途は誠に遠く、我が大御國の務は、今より、更に、益〻重大にして、出で來べき事どもは、尚も大きなることあるべし。こを思へば、征清の事のすみたらん後。行く先き長く、國民の勤め勵むべきことは、一しほ勝りて、烈しかるべきことなり。況して、事も尚、半なるをや。

又、從軍の人々の、露營に風雪を凌ぎ、この歲寒の時を過ぐし、年を踰ゆること

を想へば、如何に惻ましからぬかは。年の明け暮れ往き返るは、自然の理なり、何の惜むべく哀むべきことかあらん。あはれ、諸孃、年波のよするをば、心にし給はで、勉めて、早く、其の身を成し立て、各自の盡くすべき本分を盡くさむことを、心し給へかし　上は、大君　后宮の御事を仰ぎ奉り、下は、同胞の艱苦を察りては、如何でかは、徒にあるべき。

論説

今後の女子教育

岩下方平

教育の方針は、一定まて、不變なるべし。然れども、猶、能く、時勢を察して、宜しきを制せざるべからず。是、教育家の、常に、其の心を用うべき所なり。

我が國女子教育の事、議論、頗多かりしも、今や、全く、歸着する所あるものの如く、方針も確定して、我が固有の美德も、亦、遠からずして、其の舊に復する時あるものゝ如し。是、誠に、我が　皇上の、萬民を愛ませ給ふ博く厚き大御心より出でたる事にして、臣民の、最、欽戴せざるべからざる所なりとす。予は、常に、歐州主義を排斥すべきことを論じ、我が國風の教育を、女子に施さんとするものなり。故に、言ふ所、之に外なることなし。而して、今や、益、予が言の信なるを證することを得たり。因りて、聊、今後の女子教育に就いての意見を左に述べん。

我が國、征清の師起こりてより、將士の、海に航し、戰に赴くもの、實に、數萬人なり。而して、此等の將士の、如何に、其の任務を勤むるかを見るに、其の忠實

勇武なること、彼の如く盛なるは、世人の、徧く知ることを得たる所なるべし。其の訓練の宜と、器械の精鋭なるとは、固より、屢、大捷を得ることの資たるべけれども、畢竟、將士が、忠義の魂膽を有するに基かざるはなし。我が將士が、斯く、忠勇なる所以は、則、我が國風の美なると、敎化の宜と由ることは、論なし。而して、之を生み、之を育つる父母、亦、實に、與りて、力ありと謂ふべし。此等の父母は、皆、決して、歐州主義の敎育を受けしものに非ず。純然たる我が固有の道義を聞きたるものなり。世人の、動もすれば、頑固と爲し、卑陋と爲して、常に、輕侮する所の故老の生める所のもの、其の忠勇絶倫なることと、實に、宇内に赫灼するを以て、之を視れば、我が國風の美なると、國家古來の敎育主義の、宇内無比なることと、昭然として、明白にして、以て、予が言を證する

に足れりと謂ふべし。

之に就いて、女子の敎育も、今後は、尙、一層其の規摸を大にし、必、家庭の敎訓養成の任に堪へ得べき良母たる婦人を養成せざるべからず。征清の事終りて、我が國威、大に、宇內に伸びなば、爾後は、四方の强國と、相對立して、常に、其の變に備へざるべからず、然らば、則、今後の人民は、其の任務、頗、重大なり。是に於いて、之を生み、之を養ふ所の婦人たるもの、能く、此の精神を有し。其の子を養育せずは、我が國家の前途は、或は、危殆の事なしとも謂ふべからず。此の責務は、婦女子、決して、免るゝことを得べからず。故に、今後の女子敎育には、大に、此等國家の大關係に注意すべきを要するなり。決して、從來、無事の時と同じかるべからず。時變じ、勢移ること、斯の如し。敎育家も、

受教育者も、共に、深く、心を用うべきことならずや。

女子處世論（十四）

三輪田眞佐子

第十三　文弱の習慣を脱すべし

そも〳〵、世道をして、亂れしめざるやう、人心をして、迷はしめざるやう、慮るこそ、國民先覺者の本分なれ。されば、一利のみを見て、一害を忘れ、この得のみを言ひて、かの失を顧みざる如きは、いまだ、見識定まらざる青年をして、水火の難に陷らしむるに等しければ、最忌むべきことぞかし。しかるに、今日は、文明の美を慕ひて、文弱の弊を憂ふるもの少し。見よ高き山も、登り終ら

むには、遂に、低き谷に降り始めざるを得ず。文明と言ふは好し。されど、言ひて顧みざるときは、野蠻にだに劣らむ。思ふに、正しき道德、及、知識上の文明は、固より望むべきことなれど、世俗の所謂、文明といふものは、單に、衣食住の形式をぞ、主とするものなめる。あはれ、華美の衣を纏ひ、莊麗の家に住み、あるは、山海の珍味を食ふをもて、直に、文明に赴けりと言はむか。そは、大なる誤なり。孟子曰ひけらく、居は、氣をうつすと。誠に、かく、物質上の改良にのみ、汲々たるもの、頗、注意せざらむには、動もすれば、文弱の弊に流れ、反りて、その精神は、野蠻の質朴單純なるものにだに及ばざるに至らんむかし。郁々として、文なる周國の衰へ、羅馬の亡びしは、全、文弱の結果なりきとかや。うべなり。孔子の、文質彬々の盛を唱へて、必しも、文のみの華を取

らさりしは。

この頃、歐米の文物を摸擬せしより、得る所は、固より、多からむも、習はずもがなの奢侈の皮相上の文明をも學びける因果にや、女子の主るべき家政ゝ影響して、困難を來すこと少からず。蓋、彼の國は、我が國より、富の度、著く高し。故ゝ、能く、かれを思ひて、これを考へ、節儉質素を守り、文弱の弊を避けずは、永遠の安樂を得ること能はじ。

もし、女子たるもの、幼より、文弱の習慣を作らざるやう勸めざらんか。遂には、すきまの風も、身に寒く、綿布の衣も、身に痛く覺え、反りて、人知らぬ特種の苦痛を感ずべし。元來、人には、貴賤生活の程を異にし、老少業作の度を別にすべきゝ、文弱の病に罹りし人は、貧しうして富めるものゝ如くし、若

うして老いたるものゝ如くす。あはれ、水、倒にすれば、忽溢る。豈、獨、人事のみ、かく、顚倒するも、なほ、禍なくして止むものかは。

昔の女子、上は、長刀などを學び、下は、機により、あるは、鍬をとるなど、わざとならず、各、文弱の弊を脱する因緣ありき。故に、一朝、良人、戰陣ゝ臨まむも、黃泉に入らんも、その妻たるものは、決して、一身を處せんとて、格別、狼狽せざりしが、今日は、社會一般、文弱に流れて、怠惰、輕薄、及、虛飾等の風俗をなせり。その習慣、所謂、その身にて、その身を苦むるなり。これ、豈、唯、一身を、世ゝ處するゝ、不便なるのみかは。なほ、子孫の文弱を釀し、施いて、邦家滅亡の萠となならん。見よ、天、既に、この蒸民として、恒ゝ、春のあけぼのゝ、やう〳〵、白くなりゆく山ぎはに、紅の花を、いつもながらゝ眺

あらしめて、そが一とせの中に、亦、霜凜々、風蕭々の秋をもあらしむるものゝ、かゝる文弱の弊を矯めんためならむ。吁、天に背くものは、久しく榮えじ。心せよ。孃達、文弱の人は苦み、文弱の家は衰へ、また、文弱の國は亡びん。つらく〳〵惟るに、今日、わが旭旗の光、九連城上に輝き、わが艦隊の烟、旅順港頭に靉き得る所以のものは、他なし。わが國よは、鏡の明、玉の德あるのみならず、劍の光さへあればこそ。猶、このかしこき國體を、長よ有たんよは、我等民人、いよ〳〵、劍の光を、身にそへて、文弱の弊を避けざるべからず。孃たち、如何に考へ給ふよか。

史談

堀部金丸の養母　　大町桂月

母たる者、子の愛に溺れて、知らず〳〵其の子の一身を誤り、家名をきずつけ、先祖を辱かしむるは、世上にありふれたる流弊なり。此の如きは、眞に子を愛する者とは云ふべからず。諺にも愛する子は旅せしめよといへり。旅は苦しきものなるを愛する子を、この苦しき旅に放ちやるは、慈愛なきに似たれども、其の實、反て慈愛の深きなり。艱難は汝を玉にすとある如く、子たる者、旅して幾多の艱難を嘗むれば、其の志堅く、其の心雄々しくなりて、千辛萬苦を物とせずして、大業をなしとぐるに至るべし。されど。旅の苦しみは一時なり。一時の困苦の霜雪を經てこそ、千秋に傳ふべき功名の花は咲くなれ。これを思はずして、唯、一時の安樂を圖りて、折角の慈愛、反て子の爲に鴆毒となること、まことに、憐れむべき次第とや云はむ。思ふに、子を愛することは、賢も不肖も、差別あらず。唯、其の愛に溺るゝと、溺れざるとに由りてこそ、賢母と、然らざる者との差別は生ずるなれ。

正傳尼は、愛に溺れずして子と孫とを教へたる者にして、母たる者の摸範とするに足るべき烈女なりけり。正傳尼は、赤穗の藩士、堀部某の妻にして、一男、一女を生みけるが、男の子は、故ありて僧となりて、家を嗣ぐべくもあらねば、同族なる金丸といふ人を迎へて、其の娘にめあはせけり。其の時、金丸の年は四十二、娘の年は十六。年齢、かく隔り居れば、娘は、いたう金丸を嫌ひて、この婚姻は好ましからずといふ。正傳は色を正しうして、武士の娘にはあるまじき其の一言。本氣にて言ひしか。たゞしは戯れか。今、家中を見渡すに、金丸の如き智勇兼備の武士は、いと稀なり。堀部の家を嗣ぐべきもの、此人を措きて、外にありとも覺えず。かゝる侍を夫と仰ぐは、女子たる身の面目なるべきに、町人の娘ならば、いざ知らし、武士の娘ともいはるゝ者が、年長けたる故を以て、かゝる豪傑の武士を嫌ふことやはある。若し、なほこれを嫌はゞ、我が子にあらず。何處の非人なりとも、年若き人を求めて夫とすべし。一日も堀部の家にな居りそと、叱りければ、娘、其の理に服して、快く金丸を迎へけるとぞ。あはれ、正傳の如きは、武士の妻たるに耻ぢずといふべし。金丸の人となりの、世にすぐれたることを知りて、ひたぶるに、我が家

を嗣がさしめむとて、其の年齢の如何を顧みざるは、事の輕重を辨へたるものなり。正傳も、娘の情を察せざるにはあらず、されど、家を思ひ、名を思ひ、娘の身の上を思ふのあまり、寧ろ年長けたるも、智勇類なき人を選びて、養子とはえたるなり。今時の母たる者、聟がねを選ぶには、先づ財産の有無を問ひ、次に其の年齢を問ひて、扨、三世相をも開きて、相性の如何を見て、心を決するもの多く、其の人物の如何の如きは、度外に置きて問はず。されど、其の娘、嫁したる時は、富むといへども、聟がねは働きなければ、忽ち赤貧に陥りて困難を極むることなり。年齢の如きも、大に注意する所にして、十歳も相隔たれど、既に首を傾くる者多し。まして、金丸夫婦の如く、二十六歳も隔たれバ、假令、人物すぐれたりといへども、決して婚嫁を肯せざるべく、此等の人の目より見れど、正傳の爲しゝことは、あやしく、ものぐるほしくや思はむ。かく、あやしく、ものぐるほしく思はれてこそ、正傳が世の人に過れて、思慮の深かりしことは知らるれ。凡て、聟を擇ぶには、伎倆を第一とすべきなり。伎倆だに、非凡なれど、其の家の貧富を問ふべきにあらず。其の年齢の懸隔の如きも、亦強て問ふことを要せざるなり。

正傳の娘、金丸を迎へて一女を生みけるが、幾もなくして、果敢なくなりけれど、正傳、母になり代りて、心を盡くして、此女をはごくみけり。此の女は其の名を順といひて、生長したる後、武庸といふものを養子に迎へて、未だ祝言の杯せざりしほど、主家の難起こりて、武庸は仇を復したるのち、自殺してはてければ、順子、また、他し夫を迎へず、四十七士の墓の側に、さゝやかなる庵を結びて、一生、主家の興復を祈りけり。世に有名なる妙海尼、やがて、是れなり。

正傳は、女丈夫の聞えありければ、淺野侯、召し出して、公子長矩の傅役に取立て給ひけるに、正傳、君の恩義を感銘して、骨身を碎きて事へけり。毎朝、例の事ども終へ給はゞ、必ず、書物をさゝげて、讀書をすゝめまつり、一刻も御側をはなれずして、敎へ導き、怠り給ふけしきもあれば、涕を流しつゝ、理非を說きて、諫めけるほどに、いわけなき公子なれども、正傳の誠心に感じて、いと憚りうやまひ給ひぬ。この公子、其の性、急激にして、少しく意に叶はざることあれど、忽ち、怒りて打擲亂暴を極め給へども、一度、正傳を見れど、顏の色やはらぎ、怒も自から解けて、しづまり給へりといふ。一女子の身にして、かくばかり、公子の畏敬を

うけたりしは、全く、君を思ふ誠心堅くして、男子にも優る豪膽機智を備へたるに出れり。あはれ、正傳は、啻に家庭の善母たりしのみならず、君に事へては、類稀なる忠婦なりけり。忠婦も、亦、慈母の門より出づるとやいはまし。

正傳は、公子の性の急激なるを憂ひて、常に詞を盡くして諫めけるが、年、七十に及びて、思ふ如く事ふることを得ざりしかど、終に、任を辭して閑居しけり。さるに、長矩は、急激の故を以て、殿中にて事を誤りて、其の家、終に斷絶するに至れり、若し、正傳の諫に從ひて、事を愼み給はゞ、かゝる過はなかるべきものをとて、時の人、惜まぬはなかりけり。

淺野家の斷絶しける時、正傳、尚、世にありて、孫女順子と共に大石良雄の妻子に從ひて、京都に隱れてありけるが、數月ばかり過ぎて、義孫武庸、用事ありて、江戸より上り來りぬ。この時、正傳、他の人して、武庸にいはせしめけるやう、御身、如何なる故ありてかこゝには來れる。妻など見むとて來れるにやと問へば、あらず、大石殿に逢ひて、相談すべきことのありてなりといふ。さらば、逢はむとて、出でて逢ひけり。内に入りて順子に向ひ、御身の夫、唯今、上り來りぬ。御身は逢ひた

く思ふや、如何にといへバ、頭を低れて、しばらくは言葉なかりしが、顔を紅らめて、いと耻かしげに、然りと一言いひければ、正傳忽ち怒りて、相見むと思はゞ、まづ、御身の雙の眼をくじり出して我に示して後、御身、夫に逢ひねと云ひければ、順子は驚きて、其思慮の淺かりしことを、謝せりとぞ。あはれ、順子の其の夫に逢はんと思へるは、人の常情なり。正傳が逢はしめざりしは、人情にあらざるに似たり。されど、正傳は、其の義孫が一家の私情にひかされて、主家の事を誤ることもやあらむと、氣づかひて、わざと、心を鬼にして、相逢はしめざりしなり。正傳は實に心に泣きて、顔に怒れり。其の孫女に對して無情なるに似たるは、たま／＼以て其の君に對して忠義の心の深かりしことを知るべきなり。

四十七士が仇を復したる翌年、正傳は八十九歳を一期としてはかなくなりけり。その死に臨みし時、順子を枕邊に近づけて、四十七士は、主の仇をぞ復したれども、淺野氏の跡絶えたれバ、眼、なほ、九泉の下に瞑するを得ざらむ。御身は女子なれども、力のあらむ限り、命のあらむ限り、主家の興復を圖りねかし。今はの時に及びていふべき事はこれバかり、御身が此世にありて爲すべきこともこれバかりぞと遺

言しけれど、順子は、この遺命をかしこみて、多年、海内を行脚したる後、江戸に来りて、老中の登城するを待受けて、警衛の厳なるをも恐れず、進みて書面を差出しけるに、怪しきものなりとて、與力の手に捕へられて、詰問に逢ひければ、順子は主家を復せむとする心のほどを陳べけるに、法度の許さゞる所なれど、如何に思ふとも、其の甲斐なからむと、さとされて放たれぬ。一月ばかりたちて、順子、再び他の老中の登城するを待ちて、書面を差し出したれど、また却下られぬ。されど、順子は、猶屈せず、又書面を上りけるに、こたびは獄に下されぬ。さすがに、女なればとて、罪せられず、長矩は、罪を犯して死を賜はりたれど、如何に愁訴すとも、其の家は復すべきにあらず。此ことはりを悟りて、訴訟することをやめよとさとされけるに、詮方なく、固より惜しからぬ命なれども、今は命を捨つるとも益なし。忍びて時をまたば、また、せんすべもあらむとて、日夜、主家の興復をのみ祈りけりとぞ。其の孤忠こそ、いとあはれなれ。されど、其の孤忠は、皆祖母正傳の平生の教訓と、遺言とによりて、此の如きことを致せり。順子、たとひ烈女なりといへども、祖母の教なくんば、かくの如くなるを得ざりしならむ。これにつけても、あらまほ

しきものは善き母の教なりけり。

つら〳〵、正傳の言行を察するに、娘に二十六歳も年齢のへだゝりたる夫を迎へしめ、一言一行、急性の公子を畏服せしめ、義孫たま〳〵來りたるに、孫女をして之に逢はしめざりしが如き、一見すれば、頑固、猛烈、人情に遠きが如く思はるれども、其の裏面には、君を思ひ、家を思ひ、子を思ふ至誠至情の躍動するものあり。其の故に、其の外面の言行も、大に取るべきものあるなり。人若し、この正傳の內面の誠心を學ばずして、唯、其の外面の言行を取らば、絕世の惡婆とならむ。若しまた、其の心を取りて、其の行を取らずんば、かゝる名譽を博することを得ざるべし。千載につたへて母たるものゝ摸範とすべきは、此正傳の誠心なり。其の外面の言行も、亦子の愛に溺るゝものゝ參考に供ふべきものにこそ。

貞婦錦女（承前）

湯島　順

其の夜、結婚式もめでたく終て、巫山の夢こまやかなる眞夜中よ、新聟頓の病起りて死にけり。錦絕え入るばかり泣き悲しみ、屍骸にとり縋りて、我が身いかなれど、

斯く宿世あしきか。かゝる果敢なきうきめ見るも、皆、因縁なれど、今よりは浮世の望を絶ち、姿をかへ、尼となりて、郎君が爲に、後世の菩提とぶらはんと、宛然、生ける人に物いふ如くかき口說きて、あはや、剃刀もて、露もしたゝる許りなる烏羽玉の黑髮、かき切らんとするに、在りあふ人々、驚きとゞめて、四十九日の後には、兎にもかくにもなし給へかし。今早まりて、親たちに悲歎をかくるは、これ不孝ならずやと。さま〴〵に透しなだめければ、やう〳〵思ひとゞまりて、涙の海のしき浪の、よせては歸る舟にて、世を牛窓にあがり、我家の一間にたれ籠めて、誦經の外はあらざりき。哀なりける事どもなり。斯くて、日數積れば親たち、亦も緣附の事すゝめけるに、たゞ〳〵泡沫夢幻の世を果敢なみて、緣の事は、聞き入るべうもあらざりけり。親たちいと困じて、後には敎訓の道をかへ、汝、孝行の志にいつはりなくば、後夫を迎へて、此の家を繼ぐべし。親の心に背きて、身を救ふべき御佛の道ありやと、道理せめていさめければ、錦思ふは、親の御爲には、御佛の道に背きて、たとひ、未來は奈落の底に落つる事あらむも、何いとふべき。されど、女の貞操といふ事捨てなば、人の皮被るとも、禽獸にも劣るべし。親に孝ならむとせ

も、女の道たゝず。女の道たつれも、親に不孝なり。いかゞすべきと、心千々に摧ひて悶へけるが、やう〳〵思ひよる節やありけむ。両親の言葉に玄たがひて、備前の國岡山のさる方より、夫を迎へぬ。錦、初ての夜、入夫に己が心ざしを述べていへるやう、妾、親の言葉の背きがたくて、斯くは郎君と夫婦のかたらひをなせども、全く心に染まぬなり。さりとて、郎君を厭ふにはあらず。妾、疇に、一たび、人の家に嫁き侍べりしに、宿世あしくて、其の夜先の人うせぬ。それよりは、浮世の果敢なきを觀じ、且は、女の操やぶらじとて、菩提の道に入りてあるなり。妾が志を、あはれとおぼさば、契の道は許してよと、涙ながらに語りければ、入夫も、びんなく思ひて、汝が望にまかせ、兩親います中は、共々懇に仕へ侍らん。さて、其の後は、諸ともに浮世を出でゝ、法の道に入らんと、約束かためて、表面は夫婦のかたらひなし、一つ衾に枕ならぶれど、夢にだに契こむる事なくて、暮しけり。かくて十一年を過ぐしゝ、後父は病にをかされて失せ、母もつゞいて身まかりぬ。今はいと心安し。いざ發心して、菩提の道たどり、眞如涅槃の月を眺めばやとて、やがて、夫婦もろともに黒髮下ろし、あらゆる財寶は親屬の者に分け、此所を去りて、同じ國、細谷川の

奥山に、荊棘をひらきて、草の庵を結び、峯の嵐、軒の松風に心澄して、再、人里に出ることなく、道心けんごに世をおくりきとぞ。此事語り傳へて、親に背かず、操やぶらす。佛の道に入りては、行堅固なる事、今の世の人には、珍らしき限なり。古の中將姫にも恥ぢざらむと、其の頃のとりさたなりきといふ。

（完）

漫錄

我が母

星江

葦間はふ蟹の横文字まなぶとも
なにはの道もすぐにゆけかし

思ひ出づるさへ悲しかりけり。醫師の家に生れて、其道をつげとにやありけむ。いと幼きに、なつかしき故さとを、よそにして、葦がちる難波の志るべへ送られけり。西ひがしさへ、まだ、辨へぬ身は、人の勸むるまゝに、先、獨逸學校といふに入りて、綴字、讀方など學び初めたり。夢の間さへ、父母の上は忘られぬものを、まして、一日雪いと深くて、膚も切るばかりなれど、座に、えたへでありしに、をりしも郵便と音なひて、もてこし玉章の端に志るされしは、前の歌なりけり。女々しくも思ひわづらふもの哉、外國學するとても、爭

で此こゝろを忘れやはせんと、いそぎ筆とりて返り事しつ、其端に、

難波に生ふるよしあしも
知らぬこの身は去ら雪の
ふる里のみぞ慕はれて
父母如何にとおもひやる

となん書き添へける。

我家は何處にあると人問はゞ、楡の木陰と我は答へむ。明治の御代となりて、藩も廢せられたれど、さらでも寂しき鄙の、此頃はまして立ち昇る烟も數少なになりもてゆけど、何處へなりとも移らせやと、父なる人はの給へど、母上は、萬に慰めまつりて、去せし〳〵と留めたまふ、とゞめ給ふは老たる祖母君いませバなり、生れて境を越えずと、云ふ事を守りて、祖父君のおくつき處を掃はんとのたまへど、其理に、誰も强ひてとは云はぬなり、

母君が我家に歸ぎ給ひしも、亦、ひとへに此祖母君あれバなりけり。祖父なる人は文學もて、我が藩に召され給へり。そのかみは、文盲谷とて、藩開けて二百年の久しきに、文字の敎はひたぶるになくて、偏に武き道をのみ尙びき。祖父なる人は、志も高く、氣も雄くおはせしかど、此山里に埋木の朽ち果てんを悲しびて、藩學の暇には、京都は更なり、江戸、九州へもゆきかひて、同じ心の友を求め給へり。其中にも、賴支峯、松本奎堂、藤本鐵石などは、いと心置なき友垣にて、梁川星巖、森田節齋、藤井竹外、廣瀬旭莊などにも交り給

ひ、殊に、柴秋村とは兄弟の盟をさへ結ばせ給へり。されば教へ子あまた集ひ、其ころの名だゝる人々、あなたこなたより訪づれて、夜とて日とて絶ゆることなかりしとぞ。

されど、家の掟はいとも嚴にて、算盤をこそ取り給はね。何事も約しくとの給ひて、餘れるは、志ある人どもに頒へ與へ給へり。母上の五歳になり給へる年とか、一日好き給はぬものありて、晝の事すゝみたまはざりしを尤めたまひて、徐に母上の箸を收め、其日一日は、物もまゐらせ給はざりし事ありきと、又、務めて時の流行をいませ給ひて、母上も、流石にうら悲しく思したまふこともありしとぞ。やがて、母上の十六歳といふに、身まかり給ひければ、委しきことゞも、更に知るすべなきは、いとゞあかぬ限にこそ。

我妹なるに、日ごろ教へたまへる母上の御言葉を聞くに、女子は如何なる家に歸がんも知るべからねど、ひたすらに父母の家をのみ標準とすべかずとて、母は米をも舂けり。麻をも績めり。機も織りけり。鋤も執りけり。敷島の道と茶と花とは女子の嗜にとて、忙しきなかにも、殊に、心とめよと、祖父君はの給へり。糸竹もさる事ながら、琴より外に學ぶべからず。人々の前にては今樣こそはいなみ兼ねて彈け、怪き長歌は、ひくべからず。品高き組、許しものは、獨、樂むはよけれど、人、若、望まむ知らずと答へよ。差し出たる擧動をして、後々の悔を招くべからず。自、愚にして、あらん智慧をも隱すこそ、女子の道なれど、常々

祖父君はのたまへりきと、

かくて人となり給ひし母君の、などか生みの子を厭にまたまはざるべき。おのれは家のよ継と生れたれば、誰かれの別はわるべうなけれど、自づと人に愛でられつるが、母君はとりわきて嚴しく敎へ給へり。學校よりの歸途、鄙には珍かなれどとて、兵隊の通り行くを見てありつるほどに、何時しか日はくれて、遅く歸りたれば、斷らざりしとて、太く戒められたり。友達と約束したるを忘れたりとて、重くおきてられけり。聊の事も、再過ても、母君は何どもの給はず、我顔をのみ見守りて泣き給ひき。

實に、母君は、涕多き方にてましますなり。夏の休などにて、久しく家に在る程、友垣の病氣、其が縁屬の失せたるなど、たよりある時は、我身我家のこと悲ませ給ふなり。一日、妹が、肩懸と云ふもの得まく願ひし時は、鄙に奇なる裝して、人の目ひくは宜しからずとて、かたへより、おのれも、助け乞ひ奉りしかど、聞き入れたまはで、事細やかに戒め給ひし事もありけり、早くより、都にのみ慣れにたるおのれどもには、さらでもと思はるゝ節も、折々にはありぬなり。

耶蘇敎といふもの、何時しか故里にも入り來りて、言たくみに説きたてゝ人を誘へど、我が弟なるが、事の序に一夜詣でたりとて、母君は、おのれをも膝もとに招き、祖父君のむかしを物語り、深く戒め給ひぬ。祖父君のとて、

唐大和わたせる橋をたてぬきに

　　　かけてぞたのむ垂加のかみ

といふを示し給ひて、好むと云ふを、否みさいなまんとにはあらねど、我邦の道をも明らめで、新しきに就き、珍しきを賞でなんは、後のほど。甚恐ろしかりなむなどの給ひき。垂加の神とは、山崎闇斎の大人にて、祖父君は、はやく、其流を汲みたまひきとなり。されば、今の世の若き女子どもが、耶蘇の學校などに入りて、讃美歌など云ふもの、聲高に唱へて、憚もなく、男の中に交らふなどは、母君のいとも〳〵いみ給ふ事になむ。我家、かつて、させる事より產業を失ひて、父君の思ひなやみ給へる上に、隣なる家より火いでゝ、全く燒きたてられたれど、詮なくも、あやしき住居に、數年月かうらぶれて、世の樂、人の喜など久しく得まらぬ事となりしかど、母君は何事をか喜び給ひけん。唯にこまやかにいまして、幼な心に、煩ひなやむおのれなどを、怜かり笑ひ、事もなげにおはしき、今にして思ひ奉れは、御心の中、さぞや苦しく思しめしけん。やう〳〵舊の樣にかへりて、家も新にまつらふ事となりにたれど、傍なる土藏を、まどらくの住となして、春を迎へし時は、おのれ、既に、京都に上りて三年經たる頃なりき。其時、

　　わびしさに土藏の戸あけて眺むれど
　　　めもはるかせに梅かはるなり

と申してされけり、

先つ年、おのれ、ふと病におかされて、年の半は思はぬ歎に明し暮しぬるに、少しおこたりければ、

故里のなつかしさまゝに家にかへりて、心静に、おつきなさけの中に身を養ひしが、思ひ立ちて、一人琴平の社へと志して、父母の許を乞ひ奉りし時、母君はいたく喜ばせ給ひて、こは我が日ごろの志なりとて、幣給ひつ、事もはてゝ歸りける時、親族あまた集ひて酒もりせしに、一種二くさ、母君の物したまはぬがありしかば、早くも見て、常には、此上なう好ませ給ふ物にと怪かれしを、實は、我がいたつきの爲にとて、琴平の神に願をこめ、此二種を絶ち給ひしありけり。かくと知りせば、さきに社にて、それと願ぎ奉りて、おのれ、自、絶ちてましをと、かしこくもかなしくも思ひたり。

何時のころにかありけん。父君は赤十字社に物し給ふとて、二日三日外にいませしが、月影軒端にさし入りて、我同胞の印にと、父君も力を添へ給ひて、各手づから植ゑ置ける松二本、櫻一株、何となう心有り氣に見えたりしに、母君は手琴とり出でゝ、今様をなん彈き給ひける。

身をなが月の長谷の　紅葉の瀧に菊の酒
まむし冑の緒を解て　語りし跡も水の泡

と、繰返し〳〵歌ひ給へるを、三人の同胞も、聲を合せて歌ひけり。此歌は、彼の、大和に旗を擧げて、あえなくなりし友垣を忍ぶのにて、故祖父君の太く愛で給ひしなりけり。此宵の樂しさ、例へん方なかりき。

まむしの暇には、源氏の物語をなん、こよなうめでゝ讀み給ふ。奈良の朝、才女數多いでゝ、堂上

を堂上とも思ひ足らず。ひらぶるに、さかしらをのみ善き事として、浮きたる跡のみ多きを疎み給ふにつけて、式部が操正しく、心やさしくて、世の流行にそまざりしを、めでたまふなるべし。妹が、學校にて枕の草紙よみたりしに、清少はうれしからずとの給ひたることもありき。

世に悲しきは、よるべなき身の上にこそあれ。家榮え、勢強き程は、我家に善からぬことのみたくなみて、殊に母君を惡ざまに云ひなしたるが、主人失せ世嗣の子、博奕の徒にたばかり殺されて、殘りたる黄金なども、其が一族に掠められたる女あり、今は世の悲さ、憂さをも覺え初めて、彼方此方に傭はれて、其日〳〵を送りしかど、年も寒く、頭におく霜白くなりきては、それさへかなふべうもあらず。其が里方はとくに亡び、一族と云ふさへ、心きたなきものゝみなれば、如何ともせんすべなく〳〵迷ひありしが、父君も許し給ひて、七八代の其かみ、露程の縁はありしをとて、我家に引き取りて、鍋なるものをも、分け與ふることとなりけり。おのれも太く快からず思ひ居たりしかど、母君の心に何時しか染みて、今は唯、其が不運をかなしぶの外なくなりたり。此老女、日日社に詣でゝ祈り居るは、何事にかあるらん。

幼き時、御國ぶりのみ、旨と教へ給ひけれどにや、おのれ、文學に志して、深く本居の大人を慕ふやうになりにたれば、父君も、さまではいなみ給はで、家の業は弟に讓ることゝ定めつ、一日西洋より歸りたる里人の爲にとて、酒の筵ありた

り、おのれも、其妻なる人の久しく逢はざりしと、心置きなう物語しけるが、流石は年も若くて、彼の國の事も一わたりは學び給へど、端なくも其方樣の事など語り合ひけり。母君は此方を見たまひて何事か仰せられんけしきなりければ、取りあえず「横にはふ蟹と聞えしに、

横にはふ蟹の文字さへ知らぬ身の
この世をわたりなやむ頃かな

となん仰せられき。こは西洋の藥などよ、彼の國文字もて記るせるに、かうじ給へばなりけり。大叔父の君、かたへより、

おもひきやわが敷島を行かずして
横はふかにの世とならんはと

果は、笑ひどよめきてやみぬ。

春と夏とは、蠶飼さへし給ふなり。人をも傭ひ給はず、怪しきなりして、手づから桑をとり、時には、いもねたまはず。さらでも日々の忙がはしきに、かくては御身の爲にも惡かりなむと、諫め聞ゆれど、畏くも、皇后宮さへ、九重の上にてこがひし給ふと、漏れ承るにどのたまひて、うべなひ給はず。京都に在るころ、羽織など送りこし給ひしに、

夜をこめてたちつぬひにし綿羽織
親のめぐみとあたゝかに着よ

すべて、人に見せんとてよみ給ふにはあらざめれど、おのが身にはかゝりてこそ、なか／＼に嬉しくも、貴くも覺ゆるなれ。

嬉しきは、母君のかなしびなりけり。なつかしき

は、母君のなさけなりけり。此嬉しさ、このなつかしさは、旅衣重ねてこそは知らるなれ、我故里に若く所なしと、昔の人の詠みたりしは、實に此父母あれバなりけり。あはれ、母君、何時までもさきくいませよ。

富士の高峯も極あり　伊勢の海にも底ひあり
親はらからの情には　そこひもあらず極なし

本の雫

藤井高尚が文かくことにたんのうなりしは、みな人のしるところなり。本の雫の一篇は、高尚、己が息の但馬守高豊がうせにし事を、例のぐえん氏風の文もてしるしゝにて、字々句々肺肝よりいできしなれバ、哀とよなう深し、之をよみて涙なき者あらじ、われはそを、人にあらざる鬼といふものゝたぐひといはむ。といひて、吾のみひとり泣くも悔しさに、茲に掲げて、葉がくれの本のしづく果敢なく消ぬるとも、世の人の袖の雫に、長くとゞめおかましと、ねがふになむ。

磯城浪賴國識

末の露もとのしづくや世のなかのおくれ先だつためしなるらむ。と遍昭僧正のよまれしは、げにさる事ぞかし。其中に、日かげまつ齢の末の露の身は殘りて、葉がくれの本のしづくの、消えうせぬるこそ惜しとも、悔しとも、はかなしとも、戀しとも云はんかたなかりけれ。しか有りしやうをだに書きとゞめおきて、千歳のかたみにもなして

むと、闇にくれたる心にも思ひよりてはありつれど、手のわなゝき震ふに、涙さへ水ぐきに流れそへて、えかきやらで月日へにけり。此頃は難波に來そるに、なぐさむとはなけれど、おのづから、うちまぎるゝ事まじりて、惑ふ心の少しのどまるやうなれば、折よしと、さかしう思ひ定めて書きもてゆく。失せにし高豊はなき父母のうつくし孫で、己も妻も、いとゞ悲しうもつゝおはしたてたる一人子になむありける。又、たぐひなきだに、さうざうしう思ひつるに、かく失ひて、殘る老の世をいかにせむ。妻は早うなくなりて、ようぞかゝる夢を見ざりけると思ふに羨まし。きさらぎ六日の朝より、風の心地にわづらひぬれど、いとおどろ〳〵しうはあらざりしかば、程なくおこたりなむと思ひてありしに、隱れてありし病も、かずかず起りあひつるけにやありけむ。十一日の夜中過ぐるころより、俄に重りもて行く。されど、若く盛の男子なれば、けしうはあらじと思ひ頼むかひもなく、曉方より、やう〳〵物にひき入るゝやうにて消えはてぬ。をとゝしの秋もかく絶えいりてありしに習ひて、さりともと思へど、限の樣はまるかりけり。あへなく、淺ましく、何事も思ひわかれず、明けぬれど、心の闇にくれまどひ、亂れ落つる涙に目も見えねど、弔らひゝ來る人に見えんもはづかしく、心地なやましき樣にもてなして屛風立てめぐらしたる中に、ふし沈み居て、たけき事とは、よしと音をのみ泣くになむ。又の日、今ひとたび、なきがらを見ざらむもいぶせく思ひ

て、母屋に入りて、猶あるものとして、向ひていふやう、かくて後は、みねと力を合せて、幼き物をおほしたて丶、をんななれば、取り子して家を繼かせん。心苦しくな思ひぞ、といふも聲わな丶きて、をこがましげなれバ、言少なにていでぬ。みねといふは、なき人の妻の名なりけり。契あさからず、かたみに、またなく頼みかはしてありきと見えしに、思ひもかけぬ別の悲しさ、さこそとおしはかられて哀なり、此人、からをだに今したし見むとて、惜みて、とかういふ事のありつれど、さてもかひあるべきならねど、諫めて、をさむべき例の事ども急ぐ。親しき人々いひあはせて、とかくの事どもおきてぬ。宜しき日えり定めてぞ、北山にゐてゆく。かくいふは、文政八年といふ年のきさらぎの頃十二日にうせて、是は十四日の夕なりけり。こなたかなたの、おくりの人ども多し。己も門に出で丶見おくる。

あはれわれかぎりの道に門出をも
　見おくらん子を先にやりつる

こと丶思ふに、いと口をし。こ丶ろバへの、あはれにうつくしう、憎みがたかりしかど、思ひ出づること日にそへておほく、世の中にも、をしみあたらしがりて、何事につけても、あはれ但馬守のといふ言、いはぬ人なしと傳へきくにも、くちをしく悲しき事かぎりなし。

しら玉にまさるひとり子うしなへど
　ちゞのこがねも何にかはせむ

あとに殘れる太刀を見るに、はきて出で入りし樣

見るやうにて、堪へがたければ、

なき人の佩きし大刀ぞと見るたびに
　　はらわたをきることちこそすれ

とて、やがて、とり隠させぬ。稚きものは松野といひて、今年五つにぞなりける。まだ何事もおもひわかぬさまなり。

わが父はかへらぬ道にいでぬとも
　　しらでゑむ子を見るがかなしさ

なき人に、いとよう似かよひて覺えたるもあはれにて、

なき人のわすれがたみのみどり子の
　　そをだにおほしたてむとぞおもふ

（未完）

浪花の風

橋本丹江

これは、安政年間、大坂町奉行久須美祐儁の著はす所のものにして、當時實見せし所をしるしゝものなり。その內、女子に關すること のみをあぐ。なべて、此頃の女は奢侈にして、又、虛飾にながれ、學ぶはおろか、目にも見るべからざる風なるを、ことさらにあげつるは、人のあくを見ざれば、己が惡の知らざることあればなりけり。

當地は一體淫風にして、婦女子の風儀宜しからず。歸する所、利を專となす故、風俗おのづから廉恥の風を失へり。婦女子にて、利を得む事を專に謀る時は、淫風隆んなるべき事、其理顯然たり。男

子も商估のみ多く、只管に榮利をいとなむ故に、其父母夫たるものも、強てその事を責る事なき故に、ます〳〵其風に流るゝと見えたり。尤、歎ずべき事なり。

當地は小兒を棄つる者甚多し。是又、淫風盛なる證にして、奉行たる人の心を傷むる所なり。大槪、少くとも、月に四五人、多き時は、月に二十人のあまりに及ぶ、是、淫風の然らしむる所といへども、一つには、穢多村の者とも、其子を平人になさしめん爲に、竊にはかりて棄つるものもあり。心得あるべき事なり。

劇塲は、殊の外繁昌する土地がらなり。是、一體の風俗淫風なる故か。劇塲はおのづから繁昌し、劇塲繁昌するに由ては、淫風もいよ〳〵熾んなるべき理にて、歎かはしきことなり。劇塲見物にいづる婦女子の樣子なども、江戸とは大に相異して、狂言を見物するにはあらで俳優の人品を見物し、且、銘々の粧ひし姿を、俳優どもに見せ示すの心得なり。

夫故に身上相應のものは、劇塲見物一日の内に、凡衣服を改むること三四度に及び、甚しきものは、は幕ごとに着替するにいたるといふ。淺間しき風俗といふべし。

當地にて名高き富商、鴻池善右衛門が家の掟は、貝原篤信が定むる所といふ。此事を其家に尋るに、左樣なる事、決してこれなき由を答ふといふ。されど、世上にて、貝原が定むるといふ事、一般に唱ふる事にて、按ずるに、何か子細ありて、此事

を善右衛門方にては、深く秘する事にやとおもはる、何にいたせ、其家の掟は規則よくとゝのひて、代々これを守るといふ。其一つをいはゞ、店に居る若きものも數十人なれども、其者服四季施等、皆古來よりの仕來りを守る故、他の店の者とまぎるゝ事なく、且、この者ども、時によりて、店のひけし後は、夜中十人廿人より集りて、酒のみ戯れあそび、浄瑠璃、又は、亂舞抔の學をなして興ずる事あり。是をかげにてきく時は、美酒佳肴ありし、大酒宴のありさまなれど、其席を見れは、肴といふものなく、先は菜漬の香の物の、左なくも、鹽鰯少々ばかりを肴となして、酒のみたのしむ體、實に二百年以前はかくやありけんと思はるるほどにて、今世の目より見る時は、興のさめたる體なりといふ。又斯て當地の豪家のもの、所持の別莊抱地などの家作、いづれも良材を用ゐ、精工を撰み、尤、美を盡くして結搆を營めり。然るに、善右衛門が別莊は手びろなれども、規則にはづれし事なく、（天保年間水野の改革の時に發せし規則の内に奢の一條あり）去る天保十四年御改革のありし頃、外豪家の別莊の家作は、長押造付書院をはじめ、種々身分不相應の造作故、俄に大工を雇ひ、晝夜をあらそひ摸樣がへして、大に混雜せし事ありしに、善右衛門が別莊のみは、規則にはづれし事なき故、更に手いれなどいふ事なく、其儘にてすみきといふ事、萬事此一二事につきて、其餘の家法正しき事、推して知るべきなり。

花ふゞき

塩井雨江

その七

あはれ、いたはしいかな、一の宮の御息所、櫻姫。いかに、うつりゆき給ふ御身の上におはすらむ。玉しく都の中、去かも、竹の御園生の、御垣ちかく、上なく、ゆかしき色にはやされ、くれ竹の、いく世も、常磐に堅磐に、唯、變らず長かれとのみ、拜かれたまひしは、去年の御事なりけるに、今年は、一度、深草の奥家に埋れ給ひてより、はては、あやしき草の枕に、定なき露のよすかを求められしが、それさへ、情なき尼ヶ崎の浦風に、はしなく吹き破られ給ひて、悲しい哉、おきふしに、深く頼みを懸け給ひたる者は、潔くも、やさしくも、消えゆきて、又、見るよしも無くなり。おん身は、夢にも思ひわたらせ給はぬわだつみの境に吹き送くられ、逐に、あさましき大浪の中に捨てられ給ふ。人世、はたして、一葉の浮萍、一片の藻屑に及ばざる果敢なさ。天ならず、神ならず、畢竟、無情の人あるがゆゑのみ。思へば、憎くや、四肢を裂き、五臟を煮るも、なほ、嫉くむべくおぼゆる筑紫の五

郎。かしこくも、御息所の御坐所を騒がせ、やんごとなき御身を奪り奉らむとするさへ、口をしく、あさましく、人わざならぬを、黒雲は亂れにみだれ、狂風はあれに荒れ、沖渡る大船すら、微塵にならむずるばかりなる海原なるを、僅に、淺澤水のさゝ波にだに、おぼつかなく覺ゆる笹の小舟に、御息所の尊き御身を捨て奉り、浪の爲すにまかし奉りたる、むごくなさけなく、人心ならぬ罪、千歳萬世、天地のあらむ。限の、怨なる。

御息所の御心のはかなきは、如何なりけむ。まのあたり、ならくの底を見給ふ御心地もせられ、神にも佛にも、露ばかり、恨は結ばず、塵ばかり、道にはそむかぬものを、何の罪ゆゑに、いかなる業ゆゑに、かゝる淵には、さまよふらむ。かゝる底には、沈まんずるらむ。よく〳〵はかなき身なりけり。よし、今は、水泡ともなれ。藻屑ともなれ。何を恨みむ。くれを惜まむ。やよ、浪や、水や、汝心あらば、あはれと思はゞ、わが亡骸をだに、せめては、わが思ふ岸へ、送り屆けてな。やよ、浪よ水よ。わが爲ゆゑに、歸へらずなりにたる、かなしき者に、逢ふ瀨をこそ、わが沈みたる後に、かへす〳〵、頼むなれとの給ひて、あはや踊り入らむとし給ふ。

ありつる水夫は、あなやといひざま、おん袖に取りすがり、御悲歎は、さてこそおはさめ。さはあれど、わが身、斯く伴ひ奉るからは、御心安くおはせかし。おなじ舟には乘りたれど、彼の奴原の如き、情なき者には候はず。尼ケ崎を離れ候時より、上臈の、よる方も無げなる御悲歎を見奉りて、鯨さやる沖になれ、底知らぬ浪路をわたる身ながら、何となう、おん涙の、よそながら、身にしみる心地して、密に、つれなき者どもの心を憎く思ひたる折しも、いよ／＼、小舟に移しまゐらせむといふを聽き、いかにもして、助け奉らまほしう覺え、自、好みて、おん舟の水士とは成り奉りたる者。此の五尺の身、一寸だに、活きてあらんほどは、よしや大山と湧き立ち、九谷と沈むとも、いかで、この舟を、破りも沈めも仕る事のあるべき。やよ、見そなはせ、風も變り、波もやゝ弱りげに成り候ものを。何處へか、寄せでやおくべきと、望絶えたる捨小舟、思ひがけなき賴の綱。

されど、風は、なほ怒をとゞめず。波も、また狂うて止まず。舟は捲きあげられ投げおろされ、覆へらむとしては、危く直り。沈まむとしては、僅に浮び出づるさまさながら、木の葉の、山風に散るが如く、いかにせむかたもなく、唯、あなや／＼





といふしかりながら、水士は、骨も身も、微塵になれど、必死になりて、働きたる一心の力にや、さすがに、舟は、なほ沈まず。大船は、いかにまつらひ、何時しか見えず。

かゝりけるほどに、大空の鳴も、次第に遠くなりゆきて、海原のとゞろきも、やゝ靜まらひするけしきに成りしが、雲の色は、なか〳〵に、重げに重なり、雨いと烈しく、礫を打つばかり、もの凄く、降り出でたり。

水士は、風波の勢の弱りたるに力を得、いよ〳〵、心を盡くし、全力を極めて、働きたるが、何れを何處とも知らず、何處を何れとも思ひわかねば、唯、風の吹く方に從ひ、波のうつ方に任せて、舟を遣りたるが、雨は堰落したる堰の水の如き勢ひもて、降りまさり、元より葺くべき苫はあらねば、舟には、雨たゝへて、波なすに至れど、水士は、御息所のおんけしきの、有るか無きかに見えさせ給ふを、勵まし奉りて、願ふは水漕搔にて、水汲み捨てゝといへど、御息所は、御身をも動かし給はず。とてもかくても、あさましの身の上。唯、斯くてこそ、沈みはてめとのみ仰せ給ふ。聲音も幽にて、半は、雨の響、浪の音に、うづもれてきこえず。

あな、何時まで、さはかなき事のみの給ふ。強に、御身の上の事のみにもあらぬに、どいふに、御息所は、何をおぼし出で給ひけむ。やをら、御身を起したまひて、げに世の中に、憂きも悲歎もあらぬ汝をさへ、徒に木屑となさむ事となりては、わが年月の心に戻れり。さらば、汲まむ。いかにするものぞやとて、水士に倣ひ給ひて、思ひきや、おん書よりは、重きもの知ろしめさぬおん身が、かたくなる黒木のあやしき桶を、光るばかりのおん手に取らせ給ふ。潮ならで、雨ならで、心づくしの雫なりけり。しかも。かばかりになりても、なほ、数ならぬ者どもの身を惜しませ給ふおん心こそ、有り難く憘しく、誠に、上臈のおん際の心地するなれ。御悲歎といひ、難義といひ、非常事のみなれば、おん窶れは、一方ならざるに、おん頂より、雨にうたれ給ふ事ゆゑ、から衣、一重も、五衣も、濡れとほりて、内衣さへ、しほるばかりにて、雨水は、肌にさへ、しみ給ふに、秋の夕暮れの潮風、はてなく吹きすさめば、おん寒さも、おん身も、凍るばかりにて、み心ばかりは、かひ〴〵しく見えたまへど、御身は思ふやうならせ給はぬにや、汲み出し給ふおん袖も次第に絶え〴〵にならせ給ひて、おん命も、おぼつかなげに見え給ふぞ、あはれ

なる。
水士は、涙ながらに、わが荒栲の上衣をしぼりて、御息所にかたづけまゐらせ、さまざまと勞りきこえつゝ、漕ぎつ汲みつ、一心不亂に、我をも物をも、更におぼゑぬばかりになりて、漸くに夕つ方、何處ならむ、とある磯邊に着きぬ。舟士は、まづ岩にうちのぼりて、舟つながむとするに、此處にも無殘なるかな、わかき少女の柔和しげなるが、如何にまつらむ、あへなく仆れてあり。あな難船して、波にやうちあげられたるか、あはれの少女や、都の人とおぼゆるにと、水士の一聲。御息所は舟底にふし沈みておはしゝが、あはれといふ一言の、如何に強く響きけむ、ろやと仰せ給ひて、岩に取りつきて漸くに立ちあがり給ひしが、こや賤機かと御一聲、死骸を抱きて泣きふしたまへり。

（附言）雨江、才子にはあらねど、多病の身のくちをしや。此の頃は、腦病といふ病に取りつかれ、筆とる事、思ふやうならず。さはいへ、書き出でたる小說の、半にとだえせん事もいまはしくて、やうやくに、筆は取りたれど、唯、文字を連ねたるのみにて、見る影もあらぬをいかにせむ。願ふは、これ見そなは

す姫たち、日來の好にめでゝ、咎めな給ひぞ。

花菖蒲

千稻子

其十六

薄青き弓張月の光は、氷の如き刄の上を輝らして、霜は植ゑたる楯の上に横はり、愁雲の中に消ゆる歸雁の聲に鋒枕を欹てゝ感慨の涙を揮ふ陣中なりとも、殺氣陰々として焰に滿る篝火の下なりとも、我夫我子に逢ひ相對ひて、軍の疲勞を慰めとし方の心憂さを語らはんと、頼み來りし甲斐もなく、早や城は落ちて炎々たる焰の内に其心構も葬られ終り、山をも海をも震ひ動かす矢叫の聲の中に、白き笹龍膽の旗のみ驕り顔に飜へるを見て、御臺所は最早堪へたまはぬものゝ如く、俄爾に、胸を抑へて踉蹌り給へば、菖蒲は悲しさと御いたはしさに、御側を離れず勞りまつれど、今は慰めまつる言葉も盡きて、只袂を顏に押當てつ泣き崩るのみ。

さは云へ、方々は皆恙なく落ちさせ給ひしか。驕り驕る源氏の武士の爲めに若しや

危難にかゝり給ふが如き事はなかりしが。辛さを忍びて此處まで御臺所を御連れ申し、稍心落ち附きしと思ふ間もなく、片時も逢はしまつる事もかなはで、かゝる悲しき有樣を見ることの悲しさよ。我身一つは如何になりぬとも、御臺所の御身を如何にせん。若し敵の爲に見咎められて、捕縛の恥辱など受くる事のあらむ、平家一門の名を汚し我一家の譽をも落さん。さりとて、かく旅に疲れ悲しみに沈み給ふ御身の、あながちなる事をして、若もの事のありもせんには、如何にして我夫に見ゆべきぞ。とやせん角やせんと、心はさながら縺れたる糸の修めん術もなく、天を仰ぎては泣き、地に伏しては悲しみ、我身も殆死なんと思ふたかりの心地せり。

かゝる時に、鬨の聲間近く聞ゑて、互に打合ふ劔の聲悽じく響き來れバ、すはこそ此邊りに戰の起りたりと見ゆれ、御臺所に御怪我あらむ悔むとも詮なし。いざや此處を避けんものと、涙を打拂ひて泣伏し居給ふ御臺所の御手を執り、漸くにして起ち上れバ、少しく彼方の聲は消えて、磯の際に駒を休めたる三騎の武士あり。躇いてつらく〳〵眺むれバ、朧ながらに如何で見忘れのあるべきぞ。身は死ぬとも如何で忘るゝ時のあるべきぞ。只片時も心を離れず。一寸も眸子を去らぬ我尋ぬる人

の面影を。

御臺所も飛びたつばかりに喜び給ひ、側近く走り寄らんとする折から、又も追ひ來りたる彼の敵兵に支へられて、心ばかりは焦燥てども、女の身の如何ともする事能はず。藪の如くに繁りたる蘆の間に潛み、如何なり行くならんと眺め居れば、知盛卿は暫く退きて息を休め給ふに、折こそよけれ。尚敵に遠ざかりたる所まで落しまつり、御臺所に逢はしまつらんものと、菖蒲は瞬間の分別に、逸る心を留め兼て思はず走り出で、持ちたる竹の杖を上げて、駒の後を力の限り打てば、あはれ、駒は磯邊を傳へて走り行かで、逆卷く浪の中へ水煙と共に飛び入り、手を擧げて引きとめんとする隙もなく、早や數反ばかりの沖に鬣を振ひて泳ぎ行く。

菖蒲は口惜しく悲しく、忙然として起ち居れど、駒は此方の心を如何で知らん。尚飛びて散る浪を左右に分けて、搖れながら愈々遠ざかり行けり。

御臺所もはやと思ひ給ひけん。走り出でゝ砂の上に轉び伏し、手を上げて呼ばんとし給へど、波の巖に摧けて堂々たる音のみ高く、答ふるものは、磯馴松に習々たる潮風の嘯く聲のみ。

かくて此方は如何あらんと顧れぞ、知章は知盛卿を支へんとしたる彼大將と引組むで、鎧を揉み鐙を鳴らして、暫く互に挑み合ひしか、彼方の駒の高く嘶いて前足を立つるよと見る内、彼れ此れ駒と駒との間に撻と落ちぬ。

落ちたるまゝに知章は、彼の錣を握むで執つて抑へ、曳々聲をあげて跳ね返さんとするを引据ゑて、手早く腰の脇差の鞘をはづし、乗しかゝりて二度ぞかり貫けぞ、皮肉忽ち二つに裂けて、紫の色の血潮は湧くか如くに、鎧を染めてにじみ出たり。

かくて知章は、其首を掻斷り、父上は如何にし給ひしかと、起ち上りて望み見れバ、薄き霞の海の上を一抹染めて、潮の花波の珠、亂れ散る中に、恙なく我父は駒を泳がせ給へり。

嬉しとや思ひけん。莞爾として微笑む刹那、何處より飛び來りたるか。風を裂きて兵となる截生の流矢、知章が内兜を掠めて戞として響けバ、忽爾、彼れの眉宇に苦悶の筋動きて、涼しき兩眼に紅の色サッと走り、其身は撻と後に落ちて、淸き美はしき其顔には、瀧の如く濃血の流れ落つるぞ見ゆる。

彼方に此有様を目撃したる御臺所も菖蒲も、心狂するぞかりに驚きて、アハヤと炎

ゆるが如き滿身の熱血は、二度三度體中を廻轉して、眼も眩み足も縮み、殊更に菖蒲は覺えず知らず凡ての感覺を失ひたるまゝ、執つたる御臺所の御手を引きながらに、數歩走り寄れど、同じ流れの一發の鳴鏑、御臺所の御袂を縫うて菖蒲が被衣の袖口を眞直に擦れり。

菖蒲は苦痛の微吟をも洩らさずして軟砂の上に倒れ伏しぬ。御臺所は其上に折重なり給へり。落日の影を追うて白く映き軟砂の上を、恰も活けるが如くに流れ匍ふ紅の血汐の花は、實に彼等が、常に苦しみ常に悲しみて送りたる此現世を、將に見棄てんとする時の遺物になりける。

只一叫の瞬間に、此濱邊は最も悲しき有樣を畫き出したりき。可憐可哀の花菖蒲は遂に枯れたり。

漸くに敵兵を追ひのけて、疵に惱みたる足を引きつゝ歸り來りたる監物太郎は、此慘憺たる此光景に忽ち張りつめたる精神を破られ、刀を杖つきて蹌踉きつゝ寄り、投げ出されたるが如くにどつかりと坐し、潸々たる血の涙を紅に染まりたる三人の遺體に注ぎ、暫くは彼も又動かざりき。

漸くに松の根を堀りて、恭しく此處に三個の屍を埋め、又其前に蹲踞りて頭を垂れ、嗚咽すること久しうせり。かくて彼は横はりぬ。波の音にも再び其耳を欹てず。松の風にも再び彼の身を起さゞりき。ア丶此忠士は、此墓標の松の木の前に殉死したるなりき。

ア丶、彼等四人は最早呼べど答へず。千歳の苔の花の咲く松の木の下に永に眠れり。一の谷の林は如何に緑なりとも、須磨の浦の月は如何に明なりとも、此悲しき有様は、後の世の人の忘れんとして忘るゝ能はざる所にぞある。

（完）

文林

惜歳暮　　近衛　忠煕

ゆく年ををしむ中にもうれしきは
　小松ならべてかどのにぎはひ

月夜雪　　黒田　清綱

宵ながら月のさらむとおもひしは
　つもれる雪のひかりなりけり

竹間霞　諏訪　忠元
いくたびも夢さましつゝ竹むらに
玉とこぼれて降るあられかな

詠史　平塚　雎鳩
空かけるゆくへやいづらえら鳥の
あとに殘るはいさをなりけり

江水鳥　三輪　義方
つくま江につどふみづ鳥あさ妻の
あらしをさむみたつ空やなき

歲暮　西川須賀雄
とやえてむ斯やせましと思ふまに
あはれ今年もくれにけるかな

遠嶺雪　酒井　喜雄
小夜あらし上こそさゆれ秩父ねに
はこねに今朝は雪のふりたる

蝦夷の孝女　佐々　豐水
朝よひにこさふくえぞの島わにも
かみのまことの道をこそふめ

江寒蘆　鈴木　千別
月のなほのこる入江のあしの葉に
おく霜しろく夜ぞあけにける

歲暮雪　松本　道別
玉ほこのみちわかぬまで雪ふれり
暮れゆく年はいづくたどらむ

雪中祝　鍋島　榮子
とよ年を祝ふなるらむとなりにも
雪みるひとのこゑぞにぎはふ

蜂須賀隨子

豊としの民のみつぎを降りつもる
おほくらやまの雪にしるかな
前田　朗子

野にやまにふりつむ今朝の白雪は
年あるみ代のしるしなるらむ
松本　健子

ふる雪の山をなしたるみつぎもの
餘りある代ぞゆたけかりける
鶴　久子

老が身も火桶いだきてさむからず
雪みる世こそたのしかりけれ
中島　歌子

豊年は日ごとのふみにまづ見えて
いづこも雪のふりそめにけり

月照古橋

くちはてゝかよふ人なきいは橋に
月のかげのみ照りわたるなり
諏訪　晴子

閑居雪

ふみわくるみつの道さへなき宿は
降れかし雪のこゝろゆくまで
尾崎すう子

源義經常磐の懐にある繪形に

たらちねの乳こふ聲はやがて世を
とゞろかすべき初音なりけり
阿部　優子

年の内にうなゐ子があそべるさまを見て

明ぬから手毬はねつくうなゐ子が
こゝろはいつも春にやあらむ
橋本　丹江

征清軍人の遺族をあはれぶ

横井知萬多

旅としいへど、花を見、紅葉をめでむとてものしたるも、殘れる親、兄弟、妻子が、心づかひいはむかたなし。樂しく、おもしろき花紅葉に、遊びあくがるゝものにてもかゝり、名にのみきゝし、諸越の遠き國の、草深野の露に、あるは高き山の上の霜に、雨の夜、雪の日の別ちなく、旅寢すれば、いかに健かなる生なりとも、いたづきをも引おこしつべきを、況して、敵の地なれば、あだの忍びよりきて、其彈丸の烟ときえ、鎗劍の錆とならむもしるべからず。さらでも、もと、戰のために出ゆきたるもの、死ぬといふことは、固より、其心なれば、花々しき名をこそ思へ、命を惜むべき隙もあらず。さて、其折は、のこれるものも心づよく、いかで人にまされる名をなしてよ。人の及ばぬ績たてゝよ、よし、身は外國の土とくち給ひぬとも、其事はかく〳〵、此事はしかしかせむに、心づかひして、名もなく、功もえ立てずして、世人にな笑はれ給ひぞなど、いさめいひて出しやりつれでも、立ちいでしあとにて、涙は遂にとゞめ得ざりしならむ、まして、中には、其人なきが爲に、世をふるたづき失ひしものもこゝらならむ。それらの人々は、世わたりのことを思ふのみにても、痩せおとろへぬべきを、それにも千重にまさりて、物思ひの種なるは、ありし人のこと。まつ心にはあらねど、今日はあしき便や來む。あすはと、それのみ心にかゝりて、花の朝も、

心にむすぼるゝ八重霞をいかにせむ。紅葉のおもしろきも、心にかゝる狹霧をいかにせむ。遂に、見るべきよすがを失ふ。否、見るも中々に悲しく、物思ひの種とのみなりぬべからむ。さては、止りてなげかむより、旅なる人の上を、中々に、うらやましく思ふならむ。されど、身はゆるさるべききはにあらず。まして、君の爲、國のためとおもへる、いかで、うらみかこつかたあるべき。理はかゝれど、なほ理しらぬ涙は、遂につくる期なかるべし。さては、かゝる中にありて、心を慰むるは、たゞ折々の文の音づれあるのみ。あはれ、その音づれぞ、やみおとろへたる人が、よき醫師、めでたき藥得たらむよりも、うれしき種なるべき。さるを、その遠かりし時はいかに。その遂に絶えはてしとき、はたいかに。いはずてもありなむかし。

火の災

服部小機子

かにかくに、まゝならぬはうき世のならひ、昨日ありし住家も、けふは空しく、かはりやすきあすか川、流れ逢ふ瀬の果敢なさよ。いかなるえにしか。伊勢の濱より、難波江に移りしは、はや一年のむかしなりけり。もとより旅のかり住居、たのしき節もありぬれど、悲しき事ぞ多かりし。頃は神無月廿日あまり九ぬかの夜なりけり。舊長州屋敷常安座といふに、あやつり人形をものするものありて、觀る人あまた有りけり。また、隣の高野山には、夕方より說敎ありき、空の氣色さへしづかなれば、老いたるも若きも、打揃ひて詣づるにぞ、

我門も賑ひけり。祖母の君は、晝過ぐる頃より、東の方のしるべへとて、行かれしまゝに歸り給はず。などおそきかと、同じく住む某の君の、いとねもごろに尋ね給へば、妾もやすき心なく、思はず門へ立出でゝ、面影は見えずやと、東の方をながめやれど、更に姿もなかりけり。神の知らせ給ひしにや。妾の心は常ならず。成す業、殊にはかどらで、ひとり、淋しく、故里の友よりこせし消息など讀み居たりしに、やがて、おば君も歸り給ひて、種々の物語のうち、如何なる話のつゞきにか、ふと、三とせの昔のきのふの朝は、大地震にて、地ふり家倒れたる中にも、美濃尾張の民草は、幾千萬の數知れず、玉の緒をたちたりけるに、今年は何事もなくてすぐすこそ、めでたけれなど語らふ折しも、時計の九時を知らすやいなや。芝居より、おほくの人の、われおくれじと、あらそひ出る聲いみじ。如何なる事の起りしか。たゞ事ならじと、窓の戸押ひらきながむれど、火の災のおこりしなり。あやにく、風は我家の方へと、吹き來ることそうらめしけれ。遠近の鐘の響、あはたゞしげに打ちおどろかし、あはやと見るまに、黑きけぶり立ちのぼり、怒れる焰大空をこがして、其のあたりは、一面に火となりぬ。立ち走る人影、たけびおらぶ聲、すさまじく、火のもゆる影さへ、障子にうつり來ぬれど、こはいかにのがれんと思ひて、たゞちに、雨戸引しめ、おの〳〵いづるしたくとゝなふ。折柄、をさな子の泣く聲いとあはれにて、助け給へとよばゝるもあり。

あるは、重き物を持ち出るもあり。或は、遠きへ行いて、まだ歸らぬもありなど、そのあはれさ、あわたゞしさ、たとふるに物なし。されど、いやさかりもゆる焰と共に、心も今は空になり、かなしき思ひのたへ兼て、こゝよかしこさまよひつゝ、科戸の神も心あれ。香具土神の情なや。あはれ、此災よりたすけてよと、くるしき時の神だのみす。嗚呼、近き處なれば、我父母にもしらせんものをと、およびもなき事のみおもひつゞけて、何事もえせざる拙さよ。かゝる折から、妾の名をよぶ聲のきこゆるに、誰ぞとゝへど、某の君なり。早う〳〵とよびながら、あたりの物ども持ちいで給ふ。嬉しとも、辱なしともいはん方なし。時に火は近くもえ來りて、我身さへあつく成るに、

某の君はいづこに行き給ひしか。祖母君はいかがし給ひしか知らず。殘れるものは、たゞ、妾のみにて、知るべの人共多く來給へど、かゝる有樣なれば、せんすべもなくて、惜しき思をのこし置き、我家のもゆるを、幾度となく見かへりつゝ、身のふりをもえなほさで、打集ふ人の波をわけ、しるべの方へのがれ行きぬ。胸せまり、心動きて、更に言葉もいでざれば、しばし心をおししづめ、休らふ折から、祖母君も來給ふ。火は、はや、しづまりしにや。鐘の音もやみ、消防の男子ども歸りきぬ。されど、心安めん爲に、今一度、我やへ行かばやとて、店の男子共打連れ、いそぎいたれど、いまだ、人は山の如く、橋にはポンプのすゑありて、わたるべうもあらず。舟にて、その子らに棹

さゝせ行くに、如何にしてもうらめしくて、空を詠むれば、月いと清らかにて、江戸堀の水底に影のうつれる様、げに畫に書きたらんやうなり。武田てふ家のうらにつきて、共に舟を下り、我すまひへ至れば、あはれ、棟の端の一つだに殘らず燒け失せて、礎もろ共に、ひとまとめの灰となりけり。けふまでなしゝ業の、またく、空しくなりしこそ、かへす〴〵も口惜しけれ。げに、火の災は怖ろしきもの哉と、心にしみわたりぬ。今宵は、田簑橋の官宅に泊りぬ。人のにぎはしきに打まぎれ、我身の上は、夢の現かわかちもやらで、共にかたらひ居るに、某の君も尋ね給ひて、皆々の、つゝがなきをよろこび給ふ。夜も、はや、ふけしにや。萬の物音もしづかなり。閨に入りて、ひるのごとき月の清さに、窓あけ詠むれば、庭松影、あらはに見ゆるもさびしく、時計の二時をしらするに、又も我やをおもひいでゝ、きのふの夜は安らかに眠りしを、今宵はかゝるあさましさよと、思へばかなしさいやまさりて、燃ゆるおもひのたへ難く、やうなき繰りごとに、幾度も我身の上を歎きつゝ、落つる涙のとゞめやらず。げに、人の世ははかなきもの哉。是もすく世のいんえんかと、せきくるなみだおしかくして、拙き言の葉をつゞるになん。

朝夕につとめし業も名ごりなく
燃ゆるおもひの空にのみたつ

雜報

●恩賜の繃帯　皇后宮の、御手づから製りましし、三つ裂綿紗の繃帯を、負傷者に下し給ひし由は、豫て記しおきけるが、東京豫備病院にては、右の恩賜物を、患者の各に、一卷づゝ分配ちて、松島院長より、こは、畏くも、　皇后宮よりの恩賜物なる旨を諭しぬるに、患者等は、何れも、叡慮の深厚き程を拜まひ奉りて、坐ろ涙に咽び、かゝる尊き恩賜物を、汚れたる所に使用うるは、いとも畏しとて、各、水引もて寢臺に結び付け朝夕に、深厚き御心をしのび奉り居るとぞ。

●女生徒の服裝　曩に、文部省は、小學生徒の擧動を活潑ならしめ、且は、虚飾の弊風を防がむその主旨をもて、小學生徒は、總て、筒袖を服るべき事を訓令せしが、男生徒にありては　體操遊戯より、其他、總ての動作に便にして、亦、外觀も、頗、雄々しく見えて善けれど、女生徒にありては、元來、優美を尊とするなれば、筒袖の粗野なるも如何しく、亦、實際に差支ふかどもあるなど論ずる者ありて、文部省は、此頃、更に訓令を下し、從來の習慣上、止を得ざる場合には、筒袖を用ゐざるも差支なしとせり。こは斯くあるべき事にこそ。

●軍人妻女の龜鑑　征清の將士をして、滿腔、只、義勇奉公の念焔々たるの外、已を忘れ家を忘れて、

挺身奮闘せしむるものは、畏き我君の大御心によ る所なりといへども、夫其妻女が、よく此心を體して、父母を養ひ、家政を治め、子女を教育し、貞操を守り、聊も内顧の憂無からしむるの功も、其の多きに居らずんば非ず。青山の第〇聯隊の某中隊長、首途の際に夫人に向ひ、軍人の習慣とて、君に捧げし生命、固より生きて歸るの心無けれど、一度門を出でし上は、最早討死せしものと覺悟して、文のたよりもすな。我も亦せまじと。丈夫の決心、勇々しくも出立ちし後は、夫人好く此心を體して、家を守り父母を養ひ、蔭ながら、只其武運と戰功を祈るの外、女々しき擧動を見せざりしが、兼て姙娠中にてありしかど、良人に生別れし程も無く、月滿て、玉の樣なる男子を生み、其喜言はん方なし、或日良人の知人なる某氏、出産の祝にとて來り、何某殿には、御産の事は、兼て御心に懸けられし事なれバ、此由、早速御報知ありては如何にと言ひけるに、夫人は答へて、固より其心無きには非らねど、良人出立の際に、我一度家を出づれバ、早、亡きものと覺悟して、文のたよりもすな。我も亦せじと、呉々も言遺し參りたれバ、妾も固く此教訓を守りて、一言たりとも申し遣はさじ。固より、之を聞いて喜ぶ良人の文を見たきは山々なれど、なまなか、私の事を報じては、矢竹に逸る、敵愾の心とやらを緩め、隨ひて、忘れ果たるわが身の行末、殘る家族のことゞも、思ひ寢の夢に入りて、うたゝ故園の涙に咽び、露營の夕、鳴き渡る雁が音にも、心あらバ言傳せま

しと思ふなど、女々しき心の起りて、忠勇の念、疎かにならんも計り難けれど、彼を思ひ此を思うて、聊の消息も致すまじと、決心し居るとのことに、某氏も、あぱれ、軍人の妻たる人の心掛かなとて、强ても言はず。家に歸りて、私にこの事を細細認め、軍醫某の診察にて、産屋もいと安く、男子を産み落し、母子健全なりと、喜の手紙を、戰地なる中隊長の手許に送りしに、中隊長は之を見て、戰地徒然の心を慰め、直に認めて送りし返書は、彼の知人某氏と、軍醫との兩氏のみにて、夫人の許には來らざりしとかや。軍人たるもの丶妻女の心掛は、斯くこそあらまほしけれ。(讀賣新聞)

●赤き髯人、な驚きそ、(Strenger! Do not wonder.)
日本人は、生れ落つるより、男も女も、愛國といふこと知りをるにや。日本人が愛國の念は、いかばかり深きか、計り知り難しと、さる碧き眼、赤き髯の外國人が、舌を卷きて驚きしとぞ。赤き髯人よ。そはさる事ぞかし。そも我皇御國は、神國と申して、大君は天津御孫におはして上にましまし、吾人臣民も、皆悉に、天神、地祇の裔にて、いとも靈しく、尊き御國なり。(汝等と雜婚する者あるは、そは蕃別の裔なりと知れ。)猿の進化りきといふ、汝等の祖先等が、水草を尋ね、駱駝の尻追ひ、轉移りて建てし國體とは、異なる事を悟りなど、汝等か驚愕も、怪怖も、春の泡雪のごとくに解けなむ。猶、次々に載する美談を讀みて、我女子供迄が、大和心の程を知れよかし。

●可愛の少女　德島縣那賀郡長生村の近藤なに

がしが長女つる(十二)といふは、同村長生尋常小學校第二年生にて、學校に出ては能く課業を修め、常に首席を占めざることなく、家庭に在りては、能く兩親に孝養を盡し、甲斐〴〵しくも立働らく樣、まことに兒女の模範よと、近隣の人々の賞賛に、兩親も覺えず嬉し涙に暮れし事もありき。近頃、修身口授の時に、同縣板野郡應神村坂東とらといへる者、襪買ふためとて、母親より貰ひしを、軍費の內へ献金せしとて、其地の新聞に掲げありし事を、敎員より聞き、つるは一方ならず感に堪へ、內に歸るや、豫て自分が貯へあるを、献金したしと父に話しゝに、我子ながらも殊勝の者と、父も其志を感賞したりしが、何分些少の金なれバ、献金の道もなく、後日亦、何か宜き折もあらんとて、諭し置きしに、今度、同校職員生徒一同より、陸軍恤兵部へ、草鞋三百足を寄贈するの計畫ありときゝ、つるは喜び勇みて父にも相談の上、百足を購ひて、献納りきといふ、可愛き志の少女哉。

●少女姉に縋りて献金す　麴町區平河町に住む、天谷何がしの姉娘二人が、かゝる折には、[illegible]女とて同じく御國の民なれど、人並には參らずも、志許りなりと献金せましと、打語らひて貯金し居るを、末の妹にて、今年十二なるお八重といふが聞きつけて、姉上、妾も、母上より給はるを貯金へて、献金せまほしう侍れバ、共になかまに入れてよと云ふに、姉達は、小供の言と聞き流して、夫よりは、正月に欲しき羽根、毬など買ふ代に貯金へよと戯れつ、心にもとめで、二人は日毎に貯

金しつゝ、月日經ぬれど、今はやう〳〵、兼て思ひ設けし程になりたるより、いざ献金らんとするを、お八重はとゞめて、妾か學校より歸る迄、待ちてよといひ置きつゝ、さて學校より歸り來たれど、姉は、早、献金を屆けむとて、區役所に赴きし後なるにぞ、お八重は、いと恨めしげに、二の姉を打見やりて、あれほど頼みおきはべりしに、妾を捨てゝ、持て行き給ひしは、あまりと云へば情なしと、幼心にもゑんじつゝ、玩弄の小箱より、若干の金出して見するにぞ、姉ははと〳〵感じいりて、何時のまに、斯くは貯へしぞと問へど、母上の給ひしを、少しも費す事なくて貯へしに、斯くなり侍りと答ふるに、兩親はじめ、坐に、嬉し涙に咽び、直に、二の姉が連れだちて、一の姉の後を追ひ、共々、區役所に至りて献金りきといふ。つるといひ、此のお八重といひ、かくも、少女迄が、報國の心に切なるは、皇御國の御國たる所以にて、外國人の驚きぬるも、げに道理ぞかし。

●淑女の美事　小石川區江戸川町に住む、陸軍工兵大尉北川武といふは、先年、官より撰ばれて、獨逸國伯林といふ所に行き、兵法の道にたどりつつ、今尚、彼の地にありとかや、その家に殘るは、大尉の父母及、夫人の銀子に、一人の召使を合せて四人なるが、父なる人も、亦、止むなき用ありて、北海道に出で行き、殘るは、只、三人にて、大尉の歸朝を待ち兼つゝ、淋しき月日を送りけり。銀子つく〳〵思ふやう、時は霜月の寒天に向ひ、氣候温き我國すら、衣服重ねでは堪へ難きに、況し

て、朔風寒く雪深き、彼の地に在る軍人等は、如何に苦しき事ならむ。妾身、いやしくも、武官の妻なれバ、如何でか是をよそに見過すべきと、健氣にも思ひ起して、夫よりは、髪も結ばず、下婢も暇やりて、躬炊の業を手づからし、因りてやうやう儲れる金もて、從軍者の爲に、好き物を造りなさんと、種々に思慮を凝らしゝ末、劍持ち、銃打つ手の凍えては、軍人の、はやる心も、思ふに任せで、あらぬ不覺を取りもやせむと、ふと心づきしより、手袋を造らんと思ひ立ちしも、それも並並のにては、手の動作の妨碍となりて、惡かりなむとて、甲掛やうの物を案じ出し、只管に製りしに、塵も積れバ山となり、細き流も集まれバ、海となりぬる道理にて、手弱き女の手一つに、家事の遑もて勸めしも、此頃、五百三十程になりたれど、早速、赤十字社恤兵部に、獻納せまほしと願ひ出たりとぞ。彼の地にある軍人等、此事聞かば、其心什麼ならむ。正に彼等に云ふなるべし。かゝる厚き情受けては、死して憾も遺らすと。吾人は早く、我軍人等が、此手袋さして、勇しく、戰ふ樣を聞かまほし。

因にいふ。此の手袋は、紺木綿の表に、紋羽の裏をつけ、内には厚く綿を入れたる物ゆゑ、寒氣を防ぐには、最善く、亦、指の働も自由なれバ、誠に、便利の物なりといふ。

●別業に品評の果　あはれ明治の大御代は、萬の事の彌榮ゑ、豊榮ぬれぞ朝廷に、仕へ奉つれる者は皆、大臣君達より、判任官吏受附に至る

まで、心盡して我國を、世界の國に負さじと、勤めし功顯れて、家は赤き煉瓦となり、橋は黒き鐵となり、巴理の都にも劣らじな。髮のかたちや衣服より、言の葉さへも鵙さへぐ、外國人に似通へば、夜の會に彼の國の、人と交らひ語るとも、豈劣らめや恥ぢざらめ。かゝるあり樣なれば。學問の道も、自然、彼の國めきて、婦女迄が女學校といふに通ひて、蟹の這ふ横文字を習び、女子の權利など、六ケ敷ことといふやうになりぬ。こは、善きか惡しきか知らねど、其品行まで、彼の國人めきて下れるは、淺しく、歎かはしき事にこそ。玆に、ふたすぢを日本橋區、おまはりの橘町に住ひ、小田某の女卿心子と云ふは、例の當世令嬢にて、日々に、神田の或女學校に通ひ、蟹の横道たどりつゝ偏に勵み强めけるが、一日、日曜といふに當りしかど、日頃の、學の窓の欝を晴らさせやと、本所請地の別業に、誰かれの友だちを招き集ひぬ。げに、婦女三人よれば、姦しとの言葉に洩れず、鵙四十雀にも劣らじと、語り暮しゝが、權利學問の堅さも、何時しか碎けて、俳優の噂に移り、中にも、雀頭の秋子といふが、きん子といふと、誰がよき、くれが惡しきの品評に、衝突を起し、罵詈の果は立ち擧りて、組み付き打ちあふ騷動に、人々仲に入りて、宥めやはけ、やう〳〵納まりしも二人が心は解けずして、互に怨恨を復へさんと、計り居るといふ。外國學する婦人は、かゝる業すべきものにや。阿那うたて。

●敎育時論　近刊の社説中、女子敎育の方針

を確定すべしとて、左の如く論せり。

教育上より、義勇奉公の氣象を養成すると同時に、其の養成し得たる氣象を、實際に行はしむる策を、講すること、緊要なり。然り而して、義勇奉公の事業は、一にして足らずと雖、其の干戈を執りて、敵に臨み、生命を犠牲に供して、硝煙彈雨の間に奔走し、勝敗を流血漂杵の後に決するの一事は、奉公の最も苦しきものにして、身を忘れ、家を忘れ、父母妻子を忘れて、國家の爲に、死を誓ふものにあらざれば能はず。併し、義勇奉公の氣象は、充分に發達し、國家の爲に死を誓ふものと雖、面り父母妻子の饑寒に迫りて、凍餒する慘狀を目撃しては、鐵腸男兒も或は鄙怯未練の振舞なしとも言ひ難し。之を救治する策は、唯女子教育の方面より講するに若かずとは、吾等が、前號の教育時論にて、略ゝ論述したる所なり。爰には、尚其の餘意を紹ぎて、聊ゝ愚見を開陳し、讀者の高評を仰がんとす。

凡そ洋の東西を問はず、時の古今を論せず。內外の戰爭頻繁なる邦に在ては、武を尙ぶの氣風は、盛んに發達し來りて、萬般の事物を風靡し、獨り敵國外患に對して、其の威を振ふのみならず、國內平和の事業に對しても、亦其の威を逞くし、所謂氣を以て勝つの氣風を馴致するを常とす、此の氣風は、一方より見るときは、壯快の懦民を提撕し、元氣を作振する功ありと雖、又一方より見るときは、弱者を凌ぎて、強者を

尊び、無理を通して、道理を引込ましむる野風を致す弊なきにあらず。女子は、社會を組織する要素、教育の母なりと稱すれども、男女相對の地位より論ずれバ、弱者の地位に在りと謂はざるを得ず。弱者の地位に在るが故に、尚武の氣風盛なる時と所とに在ては、概ね男子の爲に、其の權利を侵害せられ、智德上、當然の發達を遂ぐることを得ず。或は智德上、當然の發達を遂ぐることを得るも、男子の爲に、應用の區域を狹められて、其の志を達することを得ず。其の例證は、敢て遠く求むるに及ばず。我國過去の歴史を一讀せバ、蓋し思半バに過ぐるものあるべし。今日西洋文明諸國と雖、其の尚武思想の盛んなる國と、實業思想の盛んなる國とを比較するときは、其の女子を敬愛する情に輕重の差あるや疑ふべからず。英國又は米國の如き、實業的の機關最も發達したる社會に在ては、女子の權利を重じて、之を敬愛すること、魯佛墺獨伊等の如く、國を一の大陸に立てゝ、土壌を接し、年々歳々白眼合の勢を成し、重に尚武の方面に、社會の發達を促がしたる諸國の人民に比して、遙かに厚きを見るべし。是れ獨り吾等の私言にあらず。英國の碩學ハアバード、スペンセル氏の如きも、既に論じたる所にして、氏は二人の獨乙人が、英國に到り、日曜日及祝祭日に當り、職工輩が、自ら子女を懷きて、其の妻の勞を援くる狀を目撃して、痛く鄙みたる事實を擧げて、尚武思想の盛んなる國は、自ら女

子の權利を輕ずる實ある例証となしたり。日清戰爭の初めより、今日に至る迄、教育家の議論は概ね獻身奉公の氣象を養ふ一方に傾き、即ち尚武思想養成の一方に傾きて、女子教育の如きは、措て問はざるものゝ如し。日清戰爭は、我國古來未曾有の大事件なれど、一般國民の心を激動し、滿腔の思慮を、此の一方に濺ぎ、尚武思想養成の必要を大悟せしめたること、國家の爲に喜ぶべしと雖、男兒をして、尚武の實を完くせしむるものは、女子の力與て大なるものある事實を發見せば、國家の見解上より、女子教育の大方針を定むること、豈今日の急務にあらずや。

明治の初年より、今日に至るまで、女子教育の沿革を案ずるに、其の大方針確定せずして、終始五里霧中に彷徨するものゝ如し。或は二三の西洋心醉學者が、女權擴張、男女交際の論を唱ふれど、風潮を追ふ輩は、輙ち之に贊同し、女子にして、男粧し、市中を濶歩するものあれど、放歌高吟して、白晝男子と相携へて行くものあり。

國粹保存家の一流出で來りて、古風の論を唱ふれど、島田振袖の妙嬪、俄に增加し、伊勢流小笠原流の禮式時を得て、學校生徒は、恰も舊大名の奥女中に異ならず。畢竟此の如きは、女子教育の方針、未だ確定せざるに依る、而して、女子教育の方針、確定せざるは、之を確定すべき必要の標準なきに依る。必要の標準なき

が故に、一時世間に傳播して、勢力を得たる說が、女子敎育の方針を成して、實際に其の心身を左右したるもの丶如し。

然らば、女子敎育の大方針は、如何に之を定むべきか。是れ極めて重大の問題なり。吾等の所見を以てすれば、女子敎育の大方針を定むるに、二個の標準あり。其の一は、即ち男兒をして、一旦緩急あるに臨み、容易に國家の爲に身命を棄ることを得しむるの旨趣に基くもの、即ち義勇奉公の觀念を實行せしむるの趣旨に基くものにして、其二は、即ち所謂實業振興の趣旨に基くもの是なり。第一の標準、即ち義勇奉公の觀念を實行せしむるの趣旨に基くもの丶如きは、前段既に畧論じたる通りなれば、茲に再言するの必要なしといへども、第二の實業振興の趣旨に基くもの丶如きは、聊か茲に一言せざるを得ず。我國淸國と干戈を交へてより、今日に至る迄、連戰連勝向ふ所前なし。殊に牛莊の大勝、旅順口の陷落の如きは、痛く西洋文明國の耳目を聳動し、今日に至りては孰れも、我日本帝國を以て、東洋の最强國にして、最早以前の如く輕蔑することを得ず。國際上、歐米諸國と同樣の待遇を爲さゞるべからずと言ひて、俄に敬愛尊崇の念を加へたる者の如し。即ち今回の日淸戰爭は、我國民が數十年來企望して、未だ達せざりし所の目的を俄に達して、歐米國人と比肩し、對峙するを得るに至りたるものなり。恰も平生小男の弱虫なりとて、朋輩同志に輕蔑されたる新參の

力士が、回向院の本場相撲に、日頃鍛へたる腕前を現はし、大力無双の評判ある男を、手もなく打負かして、見物人の喝采を博したるに異ならず、然れども、相撲社會の如きは、唯腕力強くして、相手を打負かし、永く敗を取らざれば、立身出世間違なしといへども、邦國の如きは、則ち然らず。一朝戰爭に依て、俄に博腕得たる所の令聞聲譽も、之を維持擴張する方法確定せざるときは、漸次に之を失ひて、吳下の舊阿蒙たるを免れざるのみならず、或は終に國運の衰替を致して、悲むべき最後を見る患なきを得ず、而して、其令聞聲譽を、平生に維持し、擴張するものは、則ち實業の振作にして、就中通商貿易に重きを置かざるを得ず。我日本帝國

が、日清戰爭の結果に依りて、歐洲列國の仲間に入り、宇內の中央に乘出したると同時に、帝國を組織する個々人民の如きも、亦同時に蟄居の舊習を脫出し、東西兩洋の中央に乘出して、世界の人間を相手に、通商貿易を營む覺悟なかるべからず。即ち東は、加奈陀、合衆國、墨西哥等に押渡り、尙進みて大西洋の航路に出で、其の商利を博し、西は、上海、香港、新嘉坡より、印度洋に出で、進みて、紅海地中海の沿岸を巡航して、英佛の商人と銖錙の利を爭ひ、南はフヒリピン群島より、濠斯土に打渡り、シドニー、メルボルン、タスマニヤ、ニユーゼーランド、オークランドの諸港を跨にかけて横行し、北は東察加半島よりベーリング海峽を出で、西比利

亞北海岸に白熊海象を捕獲して、其の利を收むる等の大志望、大決心なかるべからず。之を換言すれば、我日本男兒が、日清の戰爭に際し、身を忘れ家を忘れて、國家の爲に博し得たる所の令聞聲譽を、國民たるもの家を離れ國を離れて、國家の爲めに之を維持し、擴張するの覺悟なかるべからず。即ち今後の日本男兒たるものは、戰時には、身を忘れ、平時には家を離るゝの覺悟なかるべからざるものと知るべし。

右論ずる所を一讀せば、今日に當り、女子教育の大方針は、如何に定めざる可らざるかは、自ら明瞭なるべし。即ち間接に尙武の氣象を助長すべき國家的教育と、實業振興の目的を助成すべき教育とを以て、大方針に取り、其の實施の方法を講ぜざるべからず、之を詳言すれば、男子が教育上より養成し得たる義勇報公の觀念を實行せんとするに際し、其の意志の力を強めて、其の實行を容易ならしむると、實業の爲め、國家を離れんとするに際し、内顧の患なからしむるの二者を以て、女子教育の方針を定めざるべからざるや、明なりとす。

以上は女子教育の大方針を今日に定むるの必要に就きて、其の大體を論じたるに過ぎざれども、吾等の意志は、略明瞭なるべしと信ず。而して、其の詳細論の如きは、他日を待て再述する所あるべし。

●**男子の罪惡は女子の責**　男子の心は、率直にて淡泊なるに、移ろひ易きものなり。されど、婦

女子の如く、本來のひがみねぢけたるものならねど、容易く人の說聞き入るよりして、連れ添ふ女房などの毒舌に迷ひ、あらぬ罪惡を犯して、世の人に、犬よ畜生よと爪彈せらるゝに至るあり。身は司法の官にありながら、妻の可惡しき毒舌に惑はされて、己が甥を殺しゝさへあるならずや。思へば淺ましき事どもなり。されど、是らの男子が、いかに智慧淺く、見識といふもの足らぬとて、妻女の心直にて、魔道に誘ふ事なくば、かゝる惡事はなすまじきぞ。かへす〴〵も淺ましきは、婦人の枉れる心なり。世の男子が犯す罪惡の多くは、婦人の責と知れ。吾人、此頃も、斯る可忌しき談を、耳にすること往々なれど、それと顯然に記るさむも、餘りに淺ましきなれバ、玆に、昔にありし談一つを揭げて、世の諸孃が、從來今後に、載せし載せん美談と讀み比べて、自、心に省み給はん事を願ふになむ。あはれ、諸孃、能く愼み給ひて、心を直に優しく持ち、彼の浮屠の似非者に、外面如菩薩、內心如夜叉などの、誹謗を、な受け給ひぞ。

信濃の國更科といふ處に男住みけり。若き時に親は死にければ、姨なん親の如くに若くよりあひそひてあるに、此妻の心、いと心うき事多くて、此姑の老いかゞまり居たるを、常に憎みつつ、男にも、此姨の御心のさがなく惡しき事を云ひ聞かせければ、昔の如くにも有らず。おろかなる事多く此姨のためになりゆきけり。此姨はいといたう老いて、二重にて居たり。是を猶、

此嫁ところせがりて、今まで死なぬ事よと思ひて、よからぬ事を云ひつゝ、持ていまして、深き山に捨てゝたうびよとのみせめければ、せめられわびて、さしてむと思ひなり、月のいとあかき夜、嫗どもいざ給へ。寺にたふとき業すなり。見せ奉らんといひければ、限なくよろこびて。負はれにけり、高き山の麓に住みければ、其山に遙々と入りて、高き山の嶺の、おり來べくもあらぬに置きて逃げて來ぬ。やゝと云へど、いらへもせで家に來て思ひ居るに、言ひ腹たてけるをり、腹立ちて斯くしつれど、年頃親のごと養ひつゝあひそひにければ、いと悲しくおぼえけり。此山の上より、月いと限なくあかくて出でたるをながめて、夜ひと夜、いも寢られず。悲しくおぼえければ、かくなむよみたりける。

我心なぐさめかねつ更科や
　姨捨山にてる月を見て

とよみてなむ、又、いきてむかへもて來にける。それより後なむ、姨捨山といひける。慰めがたとは、これがよしになんありける。

●年廼舍

十二月八日　當座探

垣早梅　小中村地　河合喜左子

くれのこる年の日數のふたつみつ
　かきねの梅もさきそめにける

歳暮祝　梅村天　増山三雪子

かちどきの聲もろともにひの本の
　いさましけにもくるゝ年かな

井水　小中村天　梅村宣雄

昨日かもちりし紅葉をそのまゝに
むすぶ坂井のうすごほりかな

舟中雪　梅村人　水野忠敬
はなとちるゆきをみなから隅田川
めくらす船のおもしろきかな

枯野霜　小中村人　川島宗端
かれはてし野末にたてる女郎花
霜のけはひのすさましきかな

野殘景　前田利聲
霜をへて冬もかれせぬしらきくの
のへに殘りてさきにほひけり

寒山月　増山正治
木の葉皆あらしにちりてわか山の
こすゑのすゑにさゆる月かけ

閑居落葉　青木修
山里はにはのきよめもはてぬまに
あとおひてちる蔦のもみぢ葉

里雪　櫻井侚保
ふる雪に里わの志つのうちすさふ
きぬもたゆまぬ音のきこゆる

冬眺望　鈴木重信
木枯につはさみたれてゆふからす
なきさはくなりくるのほそ道

曉水鳥　千野千艸
池みつはまたほの暗きあかつきに
をしのうきねの聲はさやけし

名所雪　宮木滿勢子
ゆきゝするひとの歩もとたえけり
つもれる雪のふかくさのさと

渡雪　諏訪晴子
こぎてゆく船のゆくへもみえぬ迄
佐野のわたしにつもるしら雪

雪中鳥　　會主　諏訪忠元

白雪はふかくつもれとたかむらに
鳴音うもれぬむらすゝめかな

●兼題歌文寄贈方に就きて　諸姫に心つけまゐらすべきことあり。やがて、左の如し。

宛名は國光社編輯部とせらるべきこと

用紙は罫のあるなしに拘らず半紙にかぎること

然らずと、他の信書と混雑する恐あるべし。

半紙にあらざる紙、若くは、はがきなどを用ゐられたるものは、掲載せざることあるべし。

認方は半紙二折の一片に一題づゝ認め宿所姓名を詳に記さるべきこと

半紙を、竪に、長く折りたるに認められたるもの、或は、異なる兼題の歌を、仝じ紙に記されたるものは、掲載せざることあるべし。

但、仝じ兼題の歌を、仝じ紙に、連名にて認めらるゝは、いかほど、多人數にても、いさゝかも苦しからず

文字は鮮明に記さるべきこと

文字、鮮明ならず、讀みがたく、解きがたきものは、掲載せざるべし。

教の庭

十二月廿日兼題　埋火

天　東京　溝口寛子

風寒みゆめもむすばぬねやの内に
またかきおこすよはのうづみ火

地　長野縣長野町　高野辰子

ふるゆきにひともとこぬ夜は埋火を
友となしつゝふみをこそみれ

人　千葉縣佐倉町　植木鋼子

ふゆごもる柴の戸ぼそのわけ暮に
友と馴れぬるうづみびのもと

青木春子

埋火のもとにてともとかたる夜は
さながら春のこゝちこそすれ

磯野つや子

嵐ふくふゆの夜すがらまとゐして
さむさ忘るゝやとのうづみ火

（天地人のほかは原稿到着順なり）

石井徳子

ひもとけばふみに心のとゞまりて
消ゆるもしらぬうづみびの本

江馬信子

すきまもる風だにいとふ冬の夜も
寒さわするゝうづみ火のもと

永井さい子

まもさねてふけ行くよはも埋火の
四邊はふゆのこゝちこそせね

諏訪晴子

埋火のもとによりそひふみよめば
あたりのどけき心地こそすれ

佐々有鄰子

うづみびの花さき匂ふあたりには
雪のふるともおもはざりけり

澤田春子

音もなくのきむにつもるまら雪に
まむしもさらぬうづみ火の本

徳永萬壽子

もろともにかたりあかしぬ埋火の
本にまも夜のさむさはすれて

ことさらに親しかりけり冬こもる　河野　文子
友なきやどのしどのうづみ火

さゆる夜はねられぬ友といく度か　高井　孟子
掻かおこしつゝ向ふうづみび

埋火のわたりゆたかにまとゐして　久保田かつ子
はるのこてふの夢がたりせん

降る雪をちりくる花とおもふまで　上野　兼子
さむさ忘るゝうづみ火のもと

埋火のそこにはるあるこゝちして　上野　春子
さすえだずみも梅の香ぞする

埋火のわたりはなれずまとゐして　高井　米子
さむさわするゝ友もありけり

空蟬のよをへだてぬる雪のうちは　大橋　廣江
うづみびならでよる者ぞなき

ひととはぬ夜半は殊更うづみびの　大橋　兼子
上なきともとなりもこそすれ

さりかねて短きふゆの日をぞしる　羽田三緒子
暫しとまりしうづみびのもと

冬されどおいも若きもおしなべて　畠山千代子
よりそふ物はうづみびにこそ

冬の夜にみやびし友とかたらひて　神田　靜子
わくるもしらぬうづみひの本

幾度かすみさしそへつさゆる夜は　溝口奈保子
うづみびどかり親しきはなし

相思ふなかならなくにさゆる夜の　神田　樂子
うづみびどかり親しきはなし

櫻ずみおけるわたりははるなれや　千秋萬津子
うづみびとひて花と散るなり

はいの中にうもるゝねやの埋火は　千秋すゑ子
霜のしたなるもみぢにぞある

冬をさへ忘れにけりなうつみびを　磯野たま子
よふかき空のともとなしつゝ

埋火のなき世なゝせばいかにせん　城山とき子
おいたる親の夜半のねざめを

たきものゝうめが香くゆるうす霞　藥師寺芳子
春をおぼゆるうつみびのもと

さねとはる霜夜もしらで思ふどち　内藤　清子
睦みかたらふうづみびのもと

暫しとてよりそふ者をうづみびの
さりがてにのみなり勝るかな　柳　滋子

埋火のもとにこゝろもくづしつゝ
かたる夜半こそ樂しかりけれ　吉田　秀子

宵のまにうづめし炭のおきいでゝ
ねざめうれしき閨のうづみ火　吉田たけ子

友とせし松のあらしのおとたえて
いよゝこひしきうづみびの本　太田さだ子

からねこも夕げ忘れてねむるなり
四邊のどけきうづみびのもと　田邊いさ子

敷島のみちをかたりてよふかすも
みなうづみびのめぐみなり鳬　佐藤　敬子

そらたきのかをりに春の心地して
雪まつよひのねやのうづみ火　馬島久仁子

まとゐしてかたるも樂し冬の夜の
寒さもしらぬうづみ火のもと　瀬戸さと子

埋火をさのみないひぞよのひとの
わかきこゝろも埋れがちなり　橋本　丹江

そらたきに梅のにほひを通はせて
春をおぼゆるうづみびのもと　藤野たけ子

むかひてはむねの氷もうちとけて
睦みかたろふうづみびのもと　藤野もと子

冬の夜の木がらし寒みたれもみな
よりそはるなりうづみびの下　藤野みつを

かめにさす梅も匂はぬころなれど
春ごゝちするうづみ火のもと　高橋　政子

幾度かすみさしそへてうづみ火の
もとにむかしをかたる冬の夜　高橋千代子

板間もる風にふきちるうづみ火の
はいこそ春のはなと見えけれ　山田　先子

忘れにしむかしの夢もつく〲と
ほりおこさるゝ閨のうづみ火　大橋てい子

風さゆるしもよも春のこゝちして
ねやの火桶のもとの長閑けさ　大橋きみ子

かたらへど炭のにほひに言の葉の
花もさきそふこゝちこそすれ　安井　章子

埋火にさむさわすれてあしがきの
まぢかきゆきを花と見るかな　住山　幾子

さらでだにあときゑはてゝ埋火の四邊さむけきふゆのよはかな　佳山　靜子

軒端うつあらしのかぜの寒けさにはると思ひしゆめさめにけり　佳山せの子

夏ならであふぎといはんまれ人にまづうづみびをとりいでに鳬　烏山　龜子

一人より二人そひきてうづみ火のあたりせばくもなりにける哉　小野田のぶ

十二月廿日兼題
光陰を惜しむ說

天　但馬出石町ノ內谷山町　岡木くら子

きのふといひ今日とくらしてあすか川流れて早くゆく水のことしもいつしかあけくれて殘る日數も僅になりぬ心ある人誰かこの暮行くとしを惜まざらむなべて大なるわざもいみじきいさをもみな此歳月を積みてこそはつべけれされど古の聖も一寸の光陰をゝしみたまへりとかましで常なみの人に於てをやさるを大方のならひとて春は花のもとに日の暮るゝを忘れ夏は夕凉のそゞろありきに夜の更くるを知らず秋は月にうかれてかねの音も耳に入らずあずとしもなくあかしくらしつゝ徒らによる年浪のかへらぬをのみなげくこそいとかたはらいたき事なれ花の朝よし月の夕またとめでつべしされど花は散りやすく月は西にかたぶきやすし人の世もいつまでかくてやはあらるべきされど人々ひまゆく駒にたぐへ矢にたとふるとしつきをあだに過さで大御國のため我家身のためおのもおのもなすべきわざをかた時一きざみのまもつとめずてやはあるべき盡さずてやはあるべき

地　長野縣長野町八百四番　吉田　芳子

風にさそはるゝ花をゝしみ雲におほはるゝ月影をかこつはなべて人の情ならむされど暮れ行く年月こそ物學びするものゝ身にとりてはわきて惜まるれ數ふれば月日の小車は流るゝ水よりも早く花とちり青葉とかはり紅葉とうつろひ時雨とすぎ深雪

とふりて今年も早や殘り少くなりぬさるに學びはてむよみはてむと思ひし文どもは皆半なるをまして歌の林はかれ〴〵にてかき集めたる言のはもなし何事をなしてか此一年をすぐしけむなど打かこたるゝも人やりならねど如何はせむあはれこむ年こそは勉め學びましうなど獨ごつ析しも旁の妹にきゝとがめられそも姉上は朱文公の勸學の文をよみ給はずや徒に春のあしたの花をながめ秋の夕の月をめではやしなどして月日を過し今更明日をまちてはげみ明年をたのみて勉めむとするもいかでか其志のとげ其業のなる事あらむやなど語らるゝに返す言葉もなし

人

長野縣長野町本覺院內　城山とき

昨日今日と思ひくらしつる事もはや遠き昔となりにけり歳月流るゝか如しとはたゝに古の人の事の上のみかはたとへしばしの暇なりともあだに過さんには皆此のなげきにもれざるべし殊に年若き身にありては種々の事に心動きて思はず時を移すこと多かりかむかりの時の間など云ふめれど積らむ遂には指もて數へ難きに至らんあはれしむしの隙とてあだにすぐす可らざるなり昨日今日と思ひくらしつる事もはや遠きむかしとなる世の中なるをや

佐々有隣子

春は五柱の機殿にかよひて花あのや絹を織り夏は晩香舍の養蠶製糸に身をゆだね秋は梅蘂の染屋に棚機津女の糸をそめ冬は松尾校の裁縫にすがたをやつし詠歌作文の時はわづかのみなれど今一年の歌は三百六十首あまり文はやう〳〵百八十餘りを作りたるにはや年もくれちかうなりぬるをいかにせん故人のことばの一寸光陰の金言をわすれつるにあらねどとうけい表とかいふものゝきてはじめに書いでぬるも日數のきへゆく事の口惜うてなん

羽田千世子

四季折々のうつりかはりは又めぐり來る年に同しながめもあれど同年同月同日はまたなきものとはたれもしりつる事ながら花に遊びあつさを山に海

にしのぎ千草にすだく虫の音をきゝ悲さまぐ〳〵におもしろくたのしきなどおもふばかりにてまたとかへらぬ月日とは心もつかず過ぬるうち時雨のそめし紅葉の錦も木がらしの風にあとなくちりておとなふものは音たかく降るあられおくしも白き冬の夜によさむの風をしのぎつゝ友よびかはす千とりの聲きくにつけてもげにひとせの流れて早き年なみはせくしがらみもなきものをと思へは今さらのやうにすぎ行月日のをしまるゝは我のみかは貴きも賤しきもなべての人の心はおなじからんさればすぎつる事は悔いてもかへらぬ事なり之れよりむかふる年月はひと日たりとも心して老も若きも男も女もそれ〴〵に其身につとむる業をおこたらすいつも暮行としををしむ心を忘れずつとめなば身も家も榮ゆるものと思ふになん

太田さだ子

隙行く駒の足早くいそしみてすら後れがちなるをまして怠りなば其後れはいよよ甚しからんかし朝に早暁の月をふみてつとめざれバ夕には鳥邊山の烟と消え失せて何を言ひ何を爲す暇もあらざらんわきてかよわき妾等が身もて如何にはやれバとて白駒の歩みはとゞむるすべもあらぬを世のをみな子ゆめ怠らで時の間の光りを惜み時計の針のめぐるか如くいそしみはげまざらめやも

橋本丹江

およそ世の中にうまれたらん人たれかはのぞみなくてあらむその望みてふものを遂せんはたゞ勉強にありそのべんきやうにいと大切なるものは日月なり金力いかでたふとむにたらむそのこゝろざしあらば貧困のものにもなしえむ日月すでに金銀よりも貴としさらバ時間を浪費するは最大のおごりといはましきんぎん寶玉をしむに足らずたゞ光陰をしむべしげにきのふといひけふとくらしてあすか川ながれてはやき月日なり年くれてすぎこし一とせをかへり見くゆるぞせんなき

鳥山[illegible]子

花にうかれし春も月にうたひし秋も今は一時の夢にてことしもはや十日バかりになりぬかゝれバ

こそむかしの人もひまゆく駒のはやきをかこちていたづらに老いはてん身のゆくすゑをなげきけれくふものはみちてもきゆる服の中にながくのこるはとをしへられしをおもひいづるにも机の上につもれるは息のちりのみにして服の中にはこれをとてとりいでんものもなし只身にあまれるはなげきのみなるぞいと／＼くやしかりける

一月兼題

- 五日
  - 歌……寄松祝
  - 文……貴賤迎春
- 廿日
  - 歌……鶯告春
  - 文……伊勢詣の記

再注意

來二十八年一月五日發行女鑑第七十八號の兼題歌文は今月二十五日をもて〆切とすと先號に注意したりしも都合によりて右一月五日の兼題歌文は一月二十日の〆と共に掲載すべければ〆切は一月十三日と改む

正誤

女鑑第七十六號兼題附録明治二十七年月並兼題どあるは明治二十八年の月並兼題の誤また十一月廿日の文題は歌の添削を乞ふ文なり

三輪田眞佐子著

女子の本分

全壹册

右十二月二十四日より發賣可仕候

定價金貳拾五錢也地方は郵送税金六錢也（切手代用は一割増の事）

但國光又は女鑑購讀者各位には定價金の二割引（即金貳拾錢也）を以て發賣可仕候

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　國光社

女鑑第七十六號目次

（明治二十四年八月八日內務省許可）

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月貳回五日廿日發行

定價壹册	金十錢
三ケ月前金	五十五錢
半ケ年前金	壹圓
但全國無遞送料	
廣告料五號字	廿三字
詰一行金	二十錢

明治廿七年十二月二十六日印刷
同　年同　月二十七日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所　國光社

（印刷所　東京國光社印刷部）